
オルタの世界にやってきた

紅同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オルタの世界にやってきた

【Nコード】

N4099S

【作者名】

紅同盟

【あらすじ】

元軍人なチート主人公

自分で作った宇宙戦艦のワープ装置実験の失敗でマブラヴオルタネイティヴの世界にやってきた

原作ブレイク、主人公無双で頑張ります！

本作は処女作なのであたたかい目で見てください

プロローグ

遠い宇宙の彼方

宇宙空間に浮かぶ船の中で

一人の男が、故郷たる地球^{ほし}に帰る準備を進めている

??? SEID IN

「???? 戦艦ブリッジ」

次世代試作型宇宙戦艦

小型の生産プラントと戦闘戦艦がドッキング方式で繋がっており、
少人数による超長距離航海を可能とした船である

「この新ワープ航法実験が成功すればやっつと帰れるな」

場所はこの艦の艦長席

そう、俺はこの船の運用と新ワープ航法の実験の為にこの宇宙宙域
にまで来たのだ

地球からこの宙域に通常航行で数ヶ月かった

この実験が成功すれば地球に帰れるだけでなく、一度のワープで超
長距離を移動できる

と建前はいいや

「さつさと終わらせて地球に帰って自由を堪能しよう」

『マスター、準備が整いました

後はマスターの命令待ちです

それとマスターはこの数ヶ月、確実に99%は自由を堪能していました」

「なあ、それってイヤミなのか」

「そうですが何か？」

まさかマスターは”すこし暇だからアシストロイド達の様子を見てくるな”と言って、私が強制的に働かせるまでアシストロイド達と毎回遊んでいたのにワーカーホリックになってしまっ程に自由に飢えていたと、それはそれはすみませんでした

次回からはもっと厳しくいきましょう」

「お、俺がわるかったから

そ、それだけは勘弁してくれ～～！！」

俺は見事なジャンピングDO GE ZAで謝ります

今俺が話している相手は、この艦の制御AI「セイバー」

その名のとうり川澄綾子さんヴォイスの優秀な奴だ

だが、俺に対して厳しすぎるうう

「私が厳しものではありません

マスターが私を怒らせているのです」

地の文を読みやがっただと！！

「はあ、マスター何時までも遊んでないで命令をお願いします」

あ、呆れらただと！！それに俺が悪いのか！！

「やはりマスターとは一度ジックリとOHANASHIを・・・」

「よし、何時までも遊んでいたらだめだな！！
うん、すぐ実行するよ」

ヤヴァイよ、マジでやらんとO H A N A S H I される（
（；。Δ）（））ガクガクブルブル

「コホン

では次世代試作型宇宙戦艦「アヴァロン」はこれより地球に向けて新ワープ航法である「クロスゲートシステム」によるワープを開始する」

『Yesマスター

本艦はこれより「クロスゲートシステム」によるワープを開始します
システムオールグリーン、目的座標を地球に設定、発進許可をお願いします』

「次世代試作型宇宙戦艦「アヴァロン」発進」

その時はまだ知らなかった

ここから俺の運命が大きく変わってしまうなんて

??? SIDE OUT

プロローグ（後書き）

主人公の名前はかなり後で紹介です

4 / 26 編集

01 じつて地球？だよな

??? SIDE IN

「アヴァロン」ブリッジ

『マスター

起きてください！！、マスター』

目覚めると、「アヴァロン」の艦長席だった

「セイバー俺はなんでこんなところで寝ていたんだ？」

何故こんなところで寝ていたか思い出せない

『マスターご無事でなによりです

もうまもなく医療用アシストロイドが到着しますのでそのまま楽な姿勢でお待ちください』

セイバーの言葉に素直に従いアシストロイドが来るの待つ

アシストロイドはすぐに到着し、俺のバイタルチェックと治療を開始する

よし問題は無いようだな、さてと

「セイバー状況の説明を頼む」

普段ならもつと軽い調子でセイバーと話すのだが寝ていた前の記憶

が思い出せない事、セイバーがアシストロイドまで使って治療させたことに嫌な予感がする

『まず本艦は「クロスゲートシステム」による地球圏内へのワープは一応成功しました

ですがワープの影響により「クロスゲートシステム」は大破、現在修理中ですがかなりの時間がかかります』

思い出した！！

たしかに俺は指揮をとっていた

「まさか「クロスゲートシステム」が大破するとは

だけど地球に帰ってこれたならまあ問題は『いいえ、マスター重大な問題が発生しています』という事だ？」

という事だ？

地球圏内ならこの船が大破以外ならどうにでもなるはずだ

『たしかにこの艦の被害といえば「クロスゲートシステム」が壊れただけで後は何も問題ありません』

「ならどういう事だ！！」

イカン、少し焦っている

何時もなら多少の厄介ごとでも焦ることは無いのだがどうも嫌な予感がヒシヒシと感じる

『では結果だけ簡潔に

ここは地球によく似た星系、または平行世界だと思われます』

「・・・・・・・・・・はあああああああ！？」

???
S
I
E
D

O
U
T

01 じつて地球？だよね（後書き）

4 / 26 編集

02 現在状況確認中です

セイバーSIDE IN

現在、マスターは未だかつて無いほどに呆けています

『とりあえず・・・落ち着きなさい!!』

伝家の宝刀「虎竹刀」を射出しツッコんでおきましょう
どこから出したかつて?

フフッ、秘密です♪

「アガ~~~~ッ!!、ひどいやセイバー」

『どうやら落ち着いた様ですね』

「毎回毎回頭上から高速で射出するな!!」

ムッ、まだ落ち着いていないようですね

ここはもう一度「虎」俺が悪かった、現在の状況と説明をお願いします!!」

まったく、困ったマスターです

『現在この艦はL7宙域にてステルスモードでの待機及び諜報活動
中です』

「それで何でよく似た星系?

または平行世界だという結論になるんだ?」

それから私は何故この結論に達したかと説明していく

この宙域にある筈のコロニーが無いこと

太陽系の座標情報の一致

地球の文明レベルの変化

そして・・・

「さて、何でそこで平行世界なんて結論がでるんだ？

よく似た別星系なら可能性としてあるだろう

もしくは過去ないし未来への時間移動のほうはまだ可能性があるだろう」

そう時間移動のほうはまだ可能性がある

『BETAと呼ばれる地球外生命体が地球の約1/3を侵略しているからです』

このBETAと呼ばれる存在が平行世界という可能性の証明

セイバーSIDE OUT

02 現在状況確認中です（後書き）

4 / 26 編集

03 平行世界? MA J I D E

??? S I D E I N

『BETAと呼ばれる地球外生命体が地球の約1/3を侵略しているからです』

なにそれ(´・ω・｀)

『BETAと呼ばれる地球外生命体が地球の約1/3を侵略しているからです』

さらに言えば月や火星も侵略されています』

なにそれ(´・ω・｀)

『正式名称「Beings of the

Extra

Terrestrial origin whi

ch is

Adversary of human rac

e」

人類に敵対的な地球外起源種という頭文字をとってBETA』

なにそれ(´・ω・｀)

『西暦1973年にBETAが地球に来襲

西暦1998年現在まで人類はBETAに敗戦続き

ユーラシア大陸は完全にBETAの支配地域になっています

またBETAによる被害で世界総人口数は約10億人です」

呆けてる場合じゃねーな

「それで平行世界って結論かよ」

正直頭痛がする

単純に平行世界に移動しただけなら関わろうとは思わない
面倒だし、争いの火種にしかならんからな
だけど

「ちがう地球の事だが・・・

変な生物共に蹂躪され続けるなんて胸糞わりイナ」

しょうがないよな

救世主や英雄を気取るつもりなんて無いが
今の俺には救える力が、術があるから救う
考えるのは後でもできる

「セイバー

取り敢えず俺たちの「地球」に帰るのは後回しだ
こっちの「地球」助けてから帰るぞ」

『Yesマスター

我が剣はマスターの物
存分にお使い下さい』

そうと決まればやってやるぜ
覚悟しろよBETA共

? ? ?
SIDE
OUT

03 平行世界？
M A J I D E (後書き)

4 / 26 編集

04 ただいま勉強中です

セイバーSIDE IN

流石私のマスターです♪

普段の行動でもこのくらい真面目に行動してくれば良いのでしょうが・・・

まあ無駄ですね♪

私の「虎竹刀」によるツツコミくなりますし♪
ともかく今は

「セイバー、取り敢えず今の状態で集められる情報ってどれくらいだ？」

「ハッキリと言えば国家機密も集められますし地球上のコンピューターの制御を総て奪う事もできます」

「・・・なにそのチート？」

当然といえば当然です

この艦の制御と人格プログラムが大半を占めるとはいえ、私は量子コンピュータですよ？

片手間で十分事足ります

「仕方が無いと思います

私達の世界とでは時間軸だけでも500年も違います」

そう私達は西暦2501年という未来人（艦）でもある
当然といえば当然です

・・・このセリフも定着しそうですね

「取り敢えず情報収集は完璧と

・・・後はまあ今後の方針を色々考えよう」

『そうですね今後の方針を考えましょう』

ですが“マスター無双でチートでゴメン”な状況になりそうですよ

セイバーSIDE OUT

04ただいま勉強中です(後書き)

4/26編集

05俺達がチートだ！！

??? SIDE IN

「なあ、BETAって見た目と数だけであんまり驚異じゃないよな」

そう本音を言えばその程度の驚異しか無い

自己進化を多少はするとはいえ、俺たちの戦力だけで地球に存在する総てのハイヴを壊滅させるのは容易い

逆にこんな状況でも人間（国家）同士の間争い続ける所に介入するほうが厄介だ

「マスター、油断は禁物です」

それにBETAに由来するG元素とあちらの人類が考えた五次元効果爆弾、通称G弾には注意が必要です」

単純な話だけど、元々BETAが持ってたもんで作った兵器の耐性なんて簡単に持ちこたえられないし、それに重力異常なんて被害がでるもん使われたくもねえしな

「そうだな」

幾ら威力が凄まじいとしても核の放射能汚染よりもたちが悪いしな」

それに「戦術機」って言ったかな？

あんな未完成もいような兵器に乗ってまで戦っている奴らの思いが報われん

だが、今考える事じゃない

『それでマスターは今後どういう行動を?』

セイバーが今後、どの様に動いていくか聞いてくる

今の現状でやれることは色々あるが

最初にやる事は既に決めている

「まずは、月オリジナルハイブを攻略する

まずはそれからだ」

そう、月面ハイブの攻略

それに今後のことを考えて、研究用G元素の確保、BETAの生体情報の入手は絶対にやらなきゃならない
人類が今後も戦っていく為にも

「それに月に俺達の拠点を作りたいしな」

『ではPT「ゼファー」バーンナルトルバーで出撃なさるのですか?』

AM「パラディン」アイマードモジュールは調整中で使用出来ませんが?』

「必要ない

「ゼファー」と「アヴァロン」だけでも過剰戦力なのに「パラディン」まで使ったらオーバーキルになっちまう」

実際に使ったら月の形が変わりそうだしな

「とりあえずプラント艦はこの宙域に置いていく

「アヴァロン」はステルスを維持したまま月ハイブへ向かうぞ
それと地球にはこの事がバレない様に偽の情報を流しておけ」

『Yesマスター』

本艦はこれより月ハイブに向けて発進します』

さあBETA共、今度はお前らが狩られる番だ!!

???SIDE OUT

05俺達がチートだ!! (後書き)

4/26編集

戦艦の設定

・次世代試作型宇宙戦艦「アヴァロン」

少人数での運用と超長距離航行を可能とした次世代型宇宙戦艦

艦の運営・戦闘を量子コンピュータを搭載したAI「セイバー」が行い、艦の外装整備やPTなどの機体整備・人間のサポート（炊事・洗濯・医療・警備など）をアシストロイド達（あそびにいくヨのネコ型ロボです）が行う事によって一人から運用できる

なおこの艦に搭載されたワープ装置「クロスゲートシステム」は超長距離でも一度のワープで移動可能であったのだが何故か平行世界に移動してしまった。現在は大破しており修理はできるが修理予定はない

（マクロスクォーターに同じサイズのフロンティアアイランドがくつついたものです）

・量子AI「セイバー」

Fate / stay nightのセイバーさんのような性格です（CV川澄綾子）

擬似人物映像は作製しておらず、Sound Only

ただ機嫌を損ねると伝家の宝刀「虎竹刀」が何処に居ても頭上に射出される（頭蓋骨に響く痛さです）

きわめて優秀で最強AI

今後の展開によっては人型で登場予定？

・アシストロイド

二頭身のネコ型です（ドラ。もんではない。あそびにいくヨのキャラです）

会話するかどうかは今のところ考えてない

・性能

400m級戦闘艦と400m級プラント艦がドッキング状態で陸海空宇で航海できる

戦闘艦だけなら亜音速戦闘も可能。強襲型（人型）による格闘戦もできる

動力に縮退炉2基を使用する事により半永久的に莫大なエネルギーを得られる

グラビコンシステムによる重力操作によって推進剤の必要性がなく移動出来き、対Gがほぼゼロになる

装甲はゾル・オリハルコニウム

・武装、必殺武器

対空砲

対艦重ビーム砲

単装リニアカノン

ホーミングミサイル

小型マルチトレースミサイル

ES爆雷

バスターキヤノン（重量子反応砲）

ピンポイントバリアパンチ（強襲型による格闘攻撃）

・特殊能力

ピンポイントバリア

艦全体がいつも包まれておりエネルギーが切れない限りダメージを受けない

ディストーションフィールド

広範囲防御フィールドを形成し味方ごとを守る、ただしフィールドの内側に入った敵の攻撃は防げない、フィールド展開中は攻撃できない

ミラーコーティング

ミラーコーティング発生器による光学迷彩、ECS効果で隠密航行が可能

ハイ・オラクルシステム

周囲にある衛星、戦術機、広域管制機によるデータをハッキング等で得ることでBETAの行動を予測し攻撃を命中させる。情報媒体が多くなるほど未来予測にも似た命中精度を獲得できる。量子AI「セイバー」の情報処理速度があつて初めて実現したシステム

（主人公の機体にもこのシステムの恩恵を受けることが出来る）

戦艦の設定（後書き）

4 / 26 編集

06月面で無双 前編（前書き）

今回、主人公の名前が出てきます

06月面で無双 前編

??? SIDE IN

「アヴァロン」ブリッジ

はるばるきたぜお月さまあゝ

月面に存在するオリジナルハイヴをブリッジから眺める

やっぱりあんなグロテスクなもん見てると冷静さがガリガリ削れていく

「マスター落ち着いていますか？」

落ち着いていないのなら「虎竹刀」のツツコミをくらわせて落ち着かせましょうか？」

「いやおかしいよ、その落ち着かせ方!!」

なっ、なんでそんなに暴力的なかんが「やはりツツコミます」「虎竹刀」射出×3です」やめてゝ!!

「あがゝゝ!!、いつ痛すぎるゝゝ!!」

セイバー!!

俺になんか恨みが「次は×5でいきましようか？」あるわけないな!!

「ですが落ち着いたでしょう」

ちくせう、確かに落ち着いたよ

「だけど、おふざけはここまでだ

セイバー地球側の隠蔽工作は完璧か？」

『愚問ですね

すでに地球側の衛星や地上観測所の電子機器は掌握済みです

この戦いが知られることは無いと思いますが、なるべくならハイヴ内での戦闘が好ましいでしょう』

問題は無いようだな

「じゃあ作戦を確認するぞ」

作戦といってもそう難しいものじゃない

1、ハイヴモニュメント付近まで近づきミラーコーティングを解いてBETAをおびき出す

2、バスターキャノンでモニュメントとおびき出したBETAをぶっ飛ばす

3、アヴァロンごとハイヴ内に突入し残存BETAの退治と反応炉まで目指す

4、俺の専用機「ゼファー」で反応炉に接触、BETAの情報を引き出す

5、反応炉の破壊

これが作戦の概要だ

「まあそんなに難しいことはしないけど反応炉への接触の時だけは要注意だな」

『サポートはお任せください

逆に相手を完全に無力化までしてみせます』

「確かに俺一人で「ゼファー」の”アレ”を使うと逆に此方が操ら

れる可能性があるしな」

『使用しないのが一番良いのですがBETA側からの情報は必須です
ので仕方ありません』

ですが危険と判断したら速やかにBETAを排除します

マスターの安全を優先させていただきます』

「そこら辺の匙加減はセイバーに任せる

じゃあ格納庫ハンガーに行ってくる

俺が「ゼファー」に搭乗したら作戦開始だ」

『Yesマスター』

それじゃあ格納庫ハンガーに行きますかね

・

・

・

・

・

格納庫ハンガー

「ゼファー」のコックピットに乗り機体を待機状態にまで起動させていく

この機体は「RW-1P R-GUNパワード」ベースに俺専用
に作り上げた機体だ

システムオールグリーンつと

後はセイバーに通信を入れるだけだな

「セイバー準備出来たぞ

さっそく作戦を開始してくれ」

『Yesマスター』

本艦はこれより作戦を開始します』

さあ、狩りの時間の始まりだ

??? SIDE OUT

セイバー SIDE IN

『Yesマスター』

本艦はこれより作戦を開始します』

ミラーコーティングを解除しハイヴモニユメントを完全に破壊できる位置まで近づく

なんと言いますか蟻の巣近くに角砂糖を置いたら蟻が群がってくるまさにそんな光景ですね

『月には光線級がないので艦体ダメージは受けませんが精神ダメージを驚異的につけますね!』

「違うない」

ですがおびき出したBETAの数は十分でしょう

『バスターキャノン出力最大

マスター攻撃許可をお願いします』

「よし!!」

バスターキャノン発射後、ハイヴ主縦坑から突っ込む
メインシャフト
カウントスリーで発射だ

・・・3・・・2・・・1

バスターキャノン射てえー!!」

『Yesマスター』

バスターキャノン発射します!!」

セイバーSIDE OUT

???SIDE IN

「Yesマスター

バスターキャノン発射します!!」

バスターキャノンから極太の閃光が放たれる

その光は射線軸上のBETAとモニメントを一瞬で消し去る
たとえ閃光に触れずとも余波だけで死骸の山が築かれていく

「セイバー、ハイヴ主縦坑^{メインシャフト}から突っ込むぞ!!

崩落しない程度の潜行速度でたのむ」

「Yesマスター

本艦はこれよりデイス^{ヤフト}ーションフィールドを形成しハイヴ主縦^{メイン}坑からの潜行を開始します」

・

・

・

・

ハイヴ主縦坑^{メインシャフト}内部

現在、俺達は反応炉のある大広間の真上に居る

ハイヴ内に入って分かったのだが新種BETAが存在していた
確認できただけでも2種類

・ワームのような体で胴体直径170m、全長は確認出来なかった巨大BETA。要塞級を含む多数のBETAを体内からはき出している。たぶん移動母艦キャリアーのような役割を持っているのだろう。（母艦級）
・大広間と横坑スタブ結ぶBETAで創られた大型隔壁。攻撃力や思考力は無さそうで、どちらかというと生体組織に近いようだ（門（ゲート）級）

だがどちらも大した脅威ではない

ディストーションフィールドのお陰で雨のように降ってくるBETA共は勝手に自爆してくれるし、母艦級があらわれてもBETAを吐き出す瞬間にミサイルの一斉掃射で体内に居るBETA共々始末できる。門級は攻撃してこないので問題外。ハッキリいつて気持ち悪いだけの存在だ

絶対夢にまで出て魘されそうだな

潜行して30分ほどたっただろうか？
ようやく大広間を隔てる隔壁部分まで到着した

ここからが俺と「ゼファー」の仕事だ

「セイバー、俺が「ゼファー」で出撃すると同時にディストーションフィールドからピンポイントバリアに切り変える

大広間の隔壁をホロボルトプレッシャーで吹き飛ばす」

『Yesマスター』

「ゼファー」発進シーケンス開始

カタパルトデッキ固定、進路クリア、コントロールをマスターに譲渡します

発進どうぞ！！』

よっしゃー！！気合入れていくぞ

「飛鳥あすか 冬樹ふゆき

「ゼファー」出撃する」

さあ仕上げにかかるか

??? SIDE OUT

06月面で無双 前編（後書き）

4 / 26 編集

主人公と機体の説明

・飛鳥 あすか 冬樹 ふゆき

本作品におけるオリ主

西暦2501年の平行世界の地球出身

戦艦「アヴァロン」の新ワイプ装置「クロスゲートシステム」の実験の失敗（？）のせいでマブラヴオルタネイティヴの世界にやって来る

当初は「クロスゲートシステム」の修理・改造を施しサツサと帰る予定だったが人類がBETAに殺され続ける世界を知り少しでも救えるのなら救おうと決意する

基本的には不真面目で自由をこよなく愛する。だからセイバーに「虎竹刀」でのお説教を毎回くらっている。

リアリスト現実主義者だが甘い性格。救えるのなら救おうくらいしか思っていないが自分にとって大切なものが護れるなら他はどうでもいい

元軍人で科学技術部出身。バーンナルトルーパーPT開発、宇宙戦艦開発、テストパイロットを主に行なっていた（所謂天才）

肉弾戦、銃撃戦もそれなりに強い

PT「ゼファー」、戦艦「アヴァロン」、量子AI「セイバー」、ワイプ装置「クロスゲートシステム」、意思伝達システム「レゾナンス」は軍をやめてから作ったもので、技術の一部を民間企業に売った資金で作成されている

・身体的特徴

性別 男

年齢 20歳

身長 172cm

外観 黒髪・黒眼のアラド・バランガ（CV：鶏内一也）

・能力

サイコドライバー

ナノマシン身体強化（基本的にはハイ・オラクルシステム、レゾナンスへのアクセスがメインだが、反射神経・自己修復・対G能力の増加が副産物として与えられる。任意でのON・OFFが可能）

・PT「ゼファー」

主人公専用機

「RW-1P R-GUNパワード」をベースに開発した機体
変形機構のオミット、ハイツインランチャーの砲塔のショートバレル化など見た目の変更は少ないが中身はまったくの別物

縮退炉とホロニックエンジンを搭載することにより半永久的に莫大なエネルギーを扱える。（ホロニックエンジンはQLを消費して可動するが縮退炉のエネルギーで積層化QL生成システムを稼働させているのでエネルギー切れはほぼ無い）

グラビコンシステムによる重力操作で推進剤のいらないう空中浮遊と超音速戦闘（スーパースニックと呼ばれるマッハ1.2での戦闘が可能）、攻撃や防御にも転用できる。（陸海空宇で行動可能）

パイロットにかかるGをほぼゼロにする

単機での大気圏突入・突破が可能

ホロニックアーモ

QLを使用した光装甲は絶対防御と呼ばれダメージ分のQLを消費すればQLが尽きるまで破壊されない（消費QLの供給が間に合わないダメージでは破壊される）関節部分にも使用されているので理論的には損耗しない

攻撃にも使用できるが本機では積層化Q.Lを一気に半分使用するホロボルトプレッシャーのみ使用可

通常は光っているがこの機体のものは光らないようにしている

ミラーコーティング発生器による光学迷彩・E.C.S効果により隠密活動が可能

アーマードモジュール
A.M「パラディン」と合体することにより機体能力を100%使用できる

動力：縮退炉、ホロニックエンジン

装甲：ゾル・オリハルコニウム、ホロニックアーマー光装甲

基本OS：T.C.O.S

補助M.M.I：T-LINKシステム

コックピット：全天周囲モニター・リニアシート

・武装、必殺武器

バルカン砲

頭部内蔵の2門のバルカン砲

ビームカタールソード

両肩に装備されたビームソード。通常のビームソードとは異なり、カタール（湾刀）の形状である

T-LINK・ブーメラン

ビームカタールソードを連結してブーメランとして使用。T-LINKシステムでブーメランの軌道进行操作する

ツイン・マグナライフル

ビーム・実弾の両方を発射できる手持ち銃。同時発射も可能

マルチトレースミサイル

背部マルチコンテナに装備された小型ミサイル

布都御魂之剣

PTやAM用の実体剣。外見は鞘付きの日本刀。重い元素を軽い元素に変えるボイドフィールドを刃に作成し任意の質量にまで分解して斬ることができる。ただし重い元素を軽くすればするほど分解されるときに放出される熱や爆風で自身がダメージを受ける恐れがある。通常はセンサー類がある程度の危険防止をしてくれる。バリアなどの特殊防御でなければ防御は不可能。ボイドフィールドを使わなくても硬度・柔軟性共に優れるVG合金製なのでビームソード以上に切れる

左腰に装備

グラビトン・ツインランチャー

バックパックのプラスパーツに装着された重力波砲。バックパックの両側に2門装備

中長距離射撃・広範囲拡散射撃が可能。拡散するほど威力が低下する

ガイスト・ナックル

T-LINKシステムで重力場を拳に纏わせ、相手に叩きつける

ホロボルトプレッシャー

両手に集中させたQLをドリル状にして放出する。積層化QLを一気に半分使用するがフェイズ2ハイヴならモニユメントごと反応炉を破壊できる

・特殊能力

グラビティ・テリトリ

重力波バリア。物理・ビームなどの無効化

積層化Q_L生成システム

縮退炉のエネルギーを使用して積層化Q_L生成する

ミラーコーティング

ミラーコーティング発生器による光学迷彩・ECS効果

レゾナンス

人間と人間以外の生物・機械に関係なく意志の伝達を行う為のシステム

サイコドライバー・ナノマシン接続身体強化・量子コンピューターと適性のハードルが高い

しかし、意思の伝達が目的だったが相手の意志を支配するという危険性が判明した為この機体には装備されていない
量子コンピューター無しでも意志の伝達は可能だが相手によっては逆に操られたり、廃人になる可能性がある

ハイ・オラクルシステム

元々は「セイバー」の能力だが「アヴァロン」のサポート内なら能力の恩恵が受けられる

ただしナノマシン接続と対応機体でなければならない

（能力自体は戦艦の説明を参照）

・AM「パラディン」

「アーマードモジュール・ボクサー」をベースに開発したAM。縮退炉とホロニックエンジンの莫大な出力は「ゼファール」の機体能力だけでは40%ほどしか運用できない為AM「パラディン」と共に運用することで100%の能力を発揮できる。

・「パラディン・ゼファール」

「ゼファール」と「パラディン」が合体した状態。

（武装などの能力説明は「パラディン」の登場話で改めて追加します）

主人公と機体の説明（後書き）

4 / 26 編集

06月面で無双 後編

ハイヴ主縦坑内メインシャフト

大広間と呼ばれる場所までは、真下にたった一枚の隔壁があるだけ
鋼の巨人は空中で停止し、真下を睨みつける
隔壁を破壊するための一撃を放つ為に

冬樹SIDE IN

「ゼファア」のコックピットに映る外の映像は、見渡すかぎりBETAだ

前後左右上下、まさしくBETAという壁が押し迫ってくる

だが俺の機体に触れることは叶わない

グラビティウォールによってBETAは弾かれて触れられない

それどころか空中という場所のはずなのに

その場所に固定されている様にBETAの攻撃を受けても微動だにしない

けれども、この攻撃で状況は変わる

「いくぜえー！！」

ホロボルトプレッシャー！！」

両手に集中させたQLをドリル状にして真下に放出する

隔壁に着弾した次の瞬間、轟音と爆風が吹き荒れ下にいたBETA

ごと大穴を開けて吹き飛ばした

爆発の影響で視界が見えなくなるがそれも徐々になくなっていく

「あれがこのハイヴの反応炉って奴か」

青白い輝きを放つ不気味な巨大建造物（生物）？

『マスター、反応炉の上になにか居ます

予測ですがこのハイヴの管理者ではないでしょうか？』

「ああ、たぶんそうだろう」

なんか触手みたいなのが何本もあるな
捕まったらそこから侵食されそうだ

「レゾナンス」を使うためにもまず触手は無力化させる

「取り敢えず無力化させる

セイバーは牽制しつつ「レゾナンス」を使った俺が攻撃されない
ようにサポートを」

『Yesマスター、お気をつけて』

セイバーの言葉に頷いて機体を一気に管理者BETA（ブレイン重頭脳級）
に近づける

やはり触手で攻撃してきやがった

「その程度の攻撃など食らうかよ！！」

切り裂けT-LINK・ブーメラン！！」

T-LINK・ブーメランを投擲し次々と触手を切り裂いていく
それでも捌ききれない触手を右手に持つ布都御魂之剣（ボイドフィ

「ルドOFF」で切り裂き、左手に持つツイン・マグナライフルで遠距離から狙ってきている触手を撃ち落とす

管理者BETAから不快な鳴き声が漏れる

触手をすべて薙ぎ払うとそれ以外の攻撃方法が無いのか、本体だけが振り子の様に激しく動いていた

反応炉と直結しているやつだけに何があってもおかしくない

触手が修復する前に「レゾナンス」で情報を早く引き出してしまおう

「量子コンピューターLINK開始

・・・「レゾナンス」発動!!」

その瞬間BETAの意識が流れてくる

津波のように負の感情を流し、俺を蹂躪しようとする

だが無駄だ!

BETAよりも多くの感情を流しこみ負の感情ごと叩き返してやった

「掌握完了!!」

セイバー、情報収集できたか?」

俺の役目は意識を乗っ取る事だけ

それ以外に情報収集や意識操作(洗脳)までやると脳の処理が追いつかず、逆に此方が危険にさらされる

それを解決する存在が量子コンピューター「セイバー」の役割だ

『情報収集率97・98・99・100%

情報収集完了しました

同時に月に存在する反応炉には自爆命令を出しました』

「よし!!」

では反応炉を吹き飛ばしたらアヴァロンに帰投する

その後はハイヴ内から脱出、ミラーコーティングを展開しプラン
ト艦のある宙域に戻る」

『Yesマスター』

そうと決まればサッサと反応炉をぶっ壊そう。管理者BETAが変
に反撃するのも癪に障る

「グラビトン・ツインランチャー、フルドライブ!!」

・・・デッドエンドシュート!!」

機体と同じ位まで膨れ上がった二つの黒い球体がバクバクの砲
塔から高速で放たれる
反応炉に着弾した瞬間、球体は膨れ上がり反応炉とその周辺を削り
とるように破壊した

「反応炉の破壊を確認、帰投する」

『Yesマスター』

お疲れさまでした』

こうして月でのオリジナルハイヴ攻略作戦は終了した
異世界からのマレビトの手によって人類の反撃が始まる

冬樹SIDE OUT

06月面で無双 後編（後書き）

4 / 26 編集

幕間 01

冬樹SIDE IN

月のオリジナルハイヴ攻略から一週間が経過した

あの後アヴァロンに帰還した俺は機体から降りるとすぐに気絶してしまい丸一日眠り続けた

幾ら対人機動兵器戦闘に慣れていても初の対BETA戦
加えて「レゾナンス」の使用など精神的な負荷が多すぎたのだ

その事でセイバーには心配を掛けてしまった

俺が復活してすぐに『マスター、大丈夫ですか！？』と言ってきた心配してくれてありがとうと礼を言った

でも、そのあとは「虎竹刀」によるお説教だった（怖かった。すごく）

そんなやり取りが終わるとBETA戦略の構築や月面基地着工準備など準備が出来ていると報告するのだ

やっぱ優秀だよセイバーは

その後はBETAの活動が停止するまで、やる事が無くなってしまった

反応炉は破壊したが活動エネルギーが尽きるまでBETAは活動し続けていたからだ

BETAの活動停止を確認した俺達は、再び月オリジナルハイヴ（跡地）付近にまで戻って艦を月面に停泊させている

目的は勿論これからの活動拠点を作るためだ

冬樹SIDE OUT

セイバーSIDE IN

「アヴァロン」ブリッジ

私は今アシストロイド達に支持を出し基地の着工を進めている
あれだけの大空洞を全て使用して基地を作るのには時間がかかりすぎる

そのため「アトリエ」と呼ばれる地下茎構造巨大トンネル群にできた空洞を利用している

またG元素の確保、研究も同時進行中である

「マスターは今後どのような活動を？」

私は基地の建設の為、新しい動力炉を作るまでは動力源として活動出来ませんが？」

そう、マスターがどんな方針を立てて行動するにしても今はサポートしか出来ない

「そうだな、俺は一度「ゼファー」で地球に降りて世界のBETA戦線に介入

俺達の存在をアピールするするつもりだ
期間は大体3ヶ月ほどを予定している

国や国連軍に協力するにしても、個人で新勢力を作るにしても協力してくれる人材は必要だからな」

「そうですね

機密事項などは私やアシストロイドに任せられても地球側の協力

者はかならず必要になりますしね」

地球のBETAを倒すだけなら私達が反応炉を全て破壊してしまえばいい

ですが、地球圏を守るとなるとBETAの正体や守るための戦力が必要になる

「俺達じゃなくても地球圏内を守れる戦力は必要だからな」

「問題は世界のパワーバランスのですか？」

「BETAが居なくなつて

今度は世界の覇権をかけた人類同士の戦争なんてゴメンこうむりたいからな」

苦笑しながらマスターそう答えた

人の最大の味方が人ならば、最大の敵もまた人だとは皮肉な話です

「了解ですマスター」

ですが地球に降りるのならステルス輸送機と警護特化型アシストロイド2機、万能型アシストロイド1機

基本物資3ヶ月分、偽装電子マネーにクレジットカードの携帯をお願いします

それと注意事項があります」

「輸送機については了承した

注意事項つてのは？」

「G元素についてです

あの物質はどれも重く

BETA、特に光線種、重光線種を「ゼファー」に搭載される布都御魂之剣のボイドフィールド効果で分解すると強力な爆発を起こします

「ゼファー」は耐えられるでしょうが周りへの影響が大きいので

注意してください』

「ああ、充分注意しておくよ」

『後は何かありますか?』

「そうだな」

持っていく「ゼファー」の追加武装にホロニックスールドビットの追加とハイオラクルシステムの強化の為にスパイ衛星を多数打ち上げといってくれ

それと戦術機の研究、PT・AM製造工場は生産体制が整うまでで良いし、食料生産プラントも並行して建設してくれ

必要な資源や労力は随時追加してくれて構わない

G元素の使用も許可する

緊急対策以外は定期連絡の時に報告してくれ

では3ヶ月ほど留守を頼む」

『了解しましたマスター。準備に取り掛かります』

「頼む」

・

・

・

・

今後の活動方針を決めた翌日、マスターは地球に降りて行った

『マスター、無茶だけはしないでください』

さて、マスターが帰ってくるまでに仕事を終わらせてしまいましょう

フッフ、腕の見せ所ですね♪

セイバーSIDE OUT

幕間 01 (後書き)

4 / 26 編集

07コードネーム「ゴースト」 前編（前書き）

悪役のアメリカってこんなカンジかな？

07コードネーム「ゴースト」 前編

世界中のBETAと戦う戦場で謎の戦術機が確認されるようになる

- ・曰く、カタナを使いBETA全てを切り捨てた
- ・曰く、レーザー兵器を使用していた
- ・曰く、推進剤を使わず空を飛び、レーザーを避けた
- ・曰く、BETAを爆発させていた
- ・曰く、突撃級に突撃して逆に殴り飛ばした

など、様々な噂が噂をよび世界各国がこの戦術機の情報を集めるようになる

戦場に突然現れては、たった1機で戦線を押し上げては幻のように消えてしまう

確認はされるが何処の国が作ったものかまったく情報が出てこない

故にこの戦術機はこう呼ばれるようになる

コードネーム「ゴースト」と

アメリカ合衆国SIDE IN

く大統領官邸ホワイトハウス

大統領、副大統領をはじめ国の国防に関わる組織のトップ
軍事産業各社トップに数十名の技術者が緊急議会の為この会議室に
集められた

これだけの人間が一同に介する異常事態
その会議の議題が戦場で噂になっていた1機の謎の戦術機に
ついてだ

”バカバカしい”と憤りを誰しもが感じていた

会議室のスクリーンに1機の戦術機が映し出される

映像が流れて数分

あれほどバカにしていたにもかかわらず、誰しもが目を離せなくなり
誰も言葉を発しようとしなかった

映像が終了し、最初に言葉を発したのは大統領だった

「諸君、この映像を見てどう思っかね？」

重い口調で、全員を見渡しながら尋ねる

「な、何なんだこの戦術機はー！！」

「カタナ”だと！？まさか帝国が？」

「ふざけるな！！ビーム兵器の実用に成功しているだー！！」

「どうなっている？なぜ推進剤も使わずに空を飛んでいる？」

「BETAを、しかも突撃している突撃級を殴り飛ばしやがった！
？」

「いきなり消えた！！光学迷彩か？」

大統領の言葉を皮切りに次々と叫び声という喧騒が漏れる

それほどまでにこの戦術機はケタ違いの存在なのだ、無理も無いだ
ろう

しかし此のままでは会議が進まない

「少し落ち着きたまええ！！」

大統領の怒声と共に冷静さを取り戻していく彼らだが心中は穏やかではない

「大統領、この戦術機は何処の国が開発したのですか？」

誰かがたずねるがその答えは一つしかない

「現在CIAが全力で調査中だ

解っている事といえばこの戦術機が存在している事と
各国がこの戦術機を探している事ぐらいだ」

話し終わると同時に深いため息がもれる

「帝国の可能性は無いのですか？」

この戦術機の武器はあきらかに”カタナ”ですよ」

「それは最初に疑ったよ

帝国の正式な解答にCIAの現地エージェント諜報員

アメリカ派議員、国連軍まで使っても噂の一つも無かった
なにより帝国なんかにこんな技術力があつてたまるか！！」

ドンツと、拳を握った右手でテーブルを叩き苛立ちを顕にする

「どんなに軽く見積もってもこの戦術機は「F-22A ラプター」を超えている

この戦術機の技術の一部でも出回れば「YF-23 ブラックウ

イドウ？」を超える量産機まで作り出されるかもしれん」

その言葉に誰もが恐怖する

アメリカは唯でさえ世界最大の戦術機輸出国なのだ

そのアメリカの、世界最強の戦術機がハッキリ負けると言われたのだ

「ではいったいどうするのですか？」

もし、この戦術機が「第四計画」派のものにでもなったら

我々「第五計画」派は確実に追い込まれてしまいます！！」

「第五計画」が追い込まれる、その一言にまたもや静寂が訪れる

重苦しい雰囲気の中その静寂を破ったのは一体誰だったのだろうか

「ならばその戦術機を我々が鹵獲すればいい」

その一言で「そうだ！！、そのとうりだ！！」と周りが沸き立つ
我々アメリカ以上の戦術機などあつてはならないのだと

「宜しい

ではコードネーム「ゴースト」は秘密裏に鹵獲もしくは破壊を

またBETA大規模反攻作戦時に現れると推察し

「YF-23 ブラックウィドウ？」2機

残りを全て「F-22A ラプター」で纏めた

第65戦闘教導団「インフィニティーズ」を秘密裏に派遣すること
を提案する」

その言葉に誰も異議はなく会議は終了した

アメリカ合衆国 S I D E O U T

また、時を同じくして
日本帝国でもコードネーム「ゴースト」の名が今まさに上がろうと
していた

07コードネーム「ゴースト」 前編（後書き）

4 / 26 編集

07コードネーム「ゴースト」 後編（前書き）

やっとオルタのキャラ登場です
でもセリフが難しいです

07コードネーム「ゴースト」 後編

アメリカで緊急議会が行われる時を同じくして日本帝国でも動きがあった

謎の戦術機「ゴースト」について

日本帝国SIDE IN

（京都・帝都城の一室）

征夷大將軍 煌武院悠陽をはじめ紅蓮醒三郎 大将、榊是親 総理大臣、珠瀬玄丞齋 国連外務次官、情報省外務二課長 鎧衣左近、帝国陸軍技術廠第壹開発局副部長 巖谷榮二
そして五摂家の当主達に数人の信の置けるもの達

光州作戦中の為招集されていない帝国陸軍中将 彩峰萩閣を除けば日本帝国の中枢、全てと言っても間違えではないものたちが招集されている

「殿下、お願いいたします」

紅蓮の言葉に悠陽が頷く

「皆の者、まずは急な召集に集まって頂き感謝します
早速ですが皆はコードネーム「ゴースト」を知っていますか？」

その言葉に数人のものが苦々しい顔になる

「ゴースト」のせいで各国、特にアメリカからの対応や理不尽な圧力が主な原因だろう

「ゴースト」について説明する為、榊首相が説明を始める

「皆様方、私から説明させていただきます

「ゴースト」とは数ヶ月前から戦場に現れる一機の謎の戦術機のことです

各国、特に彼の国が日本を疑っているのは武装のひとつに日本刀を使用しているからなのです

ですが彼の国が異常なまでに執著する理由はそれだけではありません

珠瀬外務次官に持ってきていただいた「ゴースト」の映像を確認いただければ

その理由も理解いただけたと思います」

「では皆様、スクリーンを御覧ください

国連軍で確認された「ゴースト」の映像です」

榊首相の目配せに頷き珠瀬外務次官がスクリーンに映像を流す

「ゴースト」の映像が流れて数分がたっただろう

当初は武装の日本刀を気にしていたが、あまりの戦闘能力に目を見開いて驚くしかない

それと同時に彼の国が「ゴースト」にここまで執著する理由も納得が行く

「うゝむ、戦術機サイズの日本刀は羨ましいのゝ

しかし、この機動性に攻撃力

はては光学兵器と思わしき武装

巖谷よお主はどう思う？」

紅蓮の問いかけに「ゴースト」について考え込んでいた巖谷は

「技術者として興味がつきぬ事だらけです

日本刀、光学兵器、機動性、攻撃力、防御力

それに通常の戦術機では推進剤を使用して”跳んでいる”のに対して

この戦術機は推進剤も使わず、しかも”飛んでいる”のですからな」

確実に第四世代戦術機かそれ以上でしょう、と渋い顔で答えていた

「鎧衣課長、あなたのほうでなにか掴んではないのですか？」

「いやはや殿下、此方でも「ゴースト」の行方を追っ手はありますがどの国にも、それこそ”四番目”や”五番目”にも存在しないのです」

まさしく幽霊ゴーストのような存在ですなハッハッハッ」

悠陽の問いにも相変わらずの調子で答える鎧衣課長

「しかし、可能なかぎり調査、接触をはかるべきです

あの戦術機、もしくは技術の一部が彼の国に渡れば”五番目”は確実に増長するでしょう」

”四番目”を確実に潰しにかかると榊首相の言葉に全員が頷く

幽霊ゴーストとは名ばかりで、協力ないし鹵獲みかたされれば守護霊てきにも悪霊にもなる

「できうるなら、味方になってほしいものです」

悠陽はそう願うことしか出来なかった

こうして「ゴースト」への対応策が秘密裏に行われることになる

けして敵にしないようにと

日本帝国SIDE OUT

そして魔女も動き出す

香月 夕呼SIDE IN

くとある研究室の一角く

軍服に白衣を羽織った女性

二十代前半でありながら年齢に見合わない妖艶な美しさ持っていた

彼女は回転椅子に座り机の上のパソコンモニターに映る「ゴースト」を見つめている

「オルタネイティヴ？」最高責任者であり天才科学者でもある彼女は一人頭を悩ませていた

「あゝもうわっかんないわねー！！」

ビーム兵器使ったと思ったら今度はBETAを切ってるだけで爆発させてるし

推進剤もなく飛ぶって何よ、バカにしてるのー！！」

そう理解出来ない

この戦術機はあきらかに未知の技術の塊なのだ

ビーム兵器位なら実用化は無理でも理解の範疇だ
けれど、たった一機で戦場に現れては数十分で戦線を押し上げるな
ど異常すぎるのだ

CGじゃないかと疑いたくなってくる

「第五計画」じゃないかもしれませんが、何処の国が作ったって情
報も入って来ないし

だいたい技術力の差がありすぎる

・・・・・・これ以上映像での解析は無理ね

この私にここまで苛立たせる何て

絶対に見つけ出して私の前まで連れてきてやるんだから！」

その美しい顔立ちが眉間に寄せた深い皺で苦々しく歪む

遅々として進まぬ自身の”因果量子理論”の研究に突然あらわれた
謎の戦術機

椅子に座りなおした彼女は再び思考の海に戻る

「オルタネイティヴ？」を成功させるために

「ゴースト」が導く未来はまだ誰にもわからない

香月 夕呼SIDE OUT

07コードネーム「ゴースト」 後編（後書き）

次回より光州作戦に介入です
4 / 26 編集

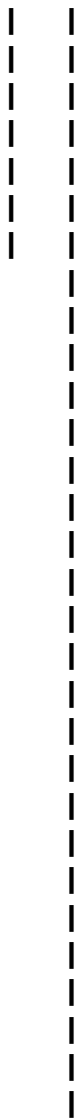
新武装とかの設定

新武装

・ホロニックシールドビット

光装甲技術で作られた小型の縦長六角形の盾群。「ゼファー」の両肩に4枚づつ計8枚装備されておりT-LINKシステムでコントロールされている。フォトンビームの広範囲速射と一度だけなら広範囲にいる味方ごと重光線級のレーザーや突撃級の突撃を防ぐ事ができる

展開中にQ.Lが切れそうな場合、自動で本体に戻り、Q.Lがチャージ出来れば再び使用が可能となる



ステルス輸送艦

ミラーコーティング発生器を装備した大気圏突入型小型輸送機
単独での大気圏突破は不可能

アシストロイド達によるオートパイロット制御

攻撃力はないが積載量がP.T-機と予備パーツなど多少積み込める
一人用簡易ベッドなども装備してある

新武装とかの設定（後書き）

4 / 26 編集

08 光州作戦 前編

1998年4月

日本帝国、大東亜連合軍、国連軍による朝鮮半島撤退支援作戦「光州作戦」を開始する

そして謎の戦術機「ゴースト」もまた姿を現す事になる

冬樹SIDE IN

「ステルス輸送機内」

数ヶ月前からユーラシア大陸を回っていた俺は人類がBETAに食われていく地獄を見せつけられていた

元軍人なこともあり、機動兵器に載っていた人を殺してしまった事もある

だが、生きたまま食われてしまうなんて事だけはなかった

一瞬で死ぬことが温情になるなんて皮肉以外の何者でもない

いくらチカラを持っていてもBETAから救けられない事のほうが多く悔しい思いを何度も繰り返した

けれど、そんな状況でも生きようという人の強さに眩しい物を感じたのもまた事実だ

戦場で度々あらわれる俺が「ゴースト」と呼ばれるようになり各国の調査対象になった

俺は一度月基地に帰還しようと「ゼファー」のコックピットで準備をしていた

しかし傍受していた通信の中に大規模戦闘が開始されたことを知った俺はすぐにスパイ衛星を使い戦闘地域を確認する

「朝鮮半島か

遠いな・・・全滅しなければいいが」

現在イギリス近くの海上にいるため、どんなに急いでも1時間半は掛かる

「全滅だけはするなよ！」

ミラーコーティングを発動させ「ゼファー」を輸送機から発進させた

冬樹SIDE OUT

彩峰 萩閣SIDE IN

「朝鮮半島沿岸部・旧市街地」

国連軍司令部は現地住民の避難救助を諦め撤退する事を決定した

本来であれば国連指揮下にある私の部隊も司令部を防衛し撤退しなければならぬ

だが、現地住民の避難救助を無視出来る筈もない

同じように脱出を拒む現地住民の避難救助を優先する大東亜連合に協力し、住民避難を急がせていた

「急ぐのだ！！もうBETAは直ぐそこまで迫っている」

《HQより帝国軍彩峰中将へ

軍令違反です。今すぐ司令部防衛に戻ってください》

「まだ、住民の避難が完了していない。戻ることは出来ない」

《許可出来ません

これ以上は日本政府へ重大な抗議措置になります。よくお考えください》

司令部から命令が届くが、住民の避難が完了していない状況で受け入れることなど出来ない

「彩峰中将、距離700でBETAを確認
旅団規模です！！・・・接敵します！！」

部下の言葉に私は部隊を鼓舞する

「我らの後には守るべき住民がいる
戦術機機甲大隊

死力を尽くせ！BETAを後ろに一步たりとも入れるな！！」

戦術機が次々にBETAに目掛けて長刀や突撃砲を放っていく

BETAを牽制しながらつい考えてしまう。

「狭霧くんが怪我で内地に移動して良かったかもしれん」

不利な状況、軍令違反、年老いた自分より早く死んでいく若者達
そんな状況が重なってきてつい思ってしまった
未来ある若者に一人でも多く生き延びて欲しいと

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・

・

どれだけ時間が過ぎただろう

一機、また一機と戦術機を蹂躪するBETAの群れ

突撃級に弾き飛ばされる物、要撃級に潰される物

果ては光線級に焼き尽くされ、生き残っていても戦車級の餌食になる物

地獄の中で生き残るために、守るために戦っていく

そのなかでまた一つ地獄が生まれていく

《HQより前軍に通達

国連司軍令部に師団規模のBETA群が接近、防衛しながら撤退を支援せよ》

此のままでは私の抜けた防衛網から突破されてしまう

「ーッ、このままでは司令部壊滅は必至だ」

・ ・ ・ ・ ・
ッどうすれば

——射線軸上から離れる——

突然声が聞こえた

瞬間、いくつもの光が降り注ぎ、瞬く間にBETAを殲滅し始めた

彩峰 萩閣SIDE OUT

08 光州作戦 前編（後書き）

うまく纏めきれないよー

4 / 27 編集

08 光州作戦 後編（前書き）

戦闘がサッパリしすぎましたOTZ

08 光州作戦 後編

冬樹SIDE IN

朝鮮半島に辿り着いたときにはBETAとの戦闘が始まっていた

俺は直ぐにミラーコーティングを解き

上空からホロニクシールドビットを展開、弾幕の雨を降らせる準備をした

——射線軸上から離れる——

オープンチャンネルで戦域にいる全ての人間に呼びかける

次の瞬間BETAを死へと誘う光の雨が降り注ぐ

閃光、轟音、爆風と共にBETAの屍の山が築かれていく

ホロニクシールドビットを元に戻し、BETAを駆逐した場所に降りる

残りのBETAが俺（「ゼファー」）目掛けて突撃してくるのを確認しながらさらに語りかける

——早く民間人を退避させろ、時間は稼いでやる——

そのまま左腰に佩いた布都御魂之剣を抜き

BETAを殲滅しようとしていたときに声をかけられた

「待つてくれ!!」

私は帝国軍中将 彩峰萩閣

助けてもらって言うのも何だが貴殿だけでは危険過ぎる!!」

——心配無用、逆にお前らこそ近づくな。巻き込まない自身がない

——

——十分で終わらせる。ついでに司令部の救援にも行ってやる。避難が終わったらお前らも司令部に行け——

それだけ伝え、今度こそ俺はBETA共の元に跳び込んだ

冬樹SIDE OUT

彩峰 萩閣SIDE IN

突然光の雨と共に空から現れた戦術機

理由が分からなかった

我らがあれほど苦戦していたBETA共が一瞬で1/3も駆逐されていた

「待つてくれ!!」

私は帝国軍中将 彩峰萩閣

助けてもらって言うのも何だが貴殿だけでは危険過ぎる!!」

場違いな忠告だと思ったが言わずにはいられなかった

だが軽い口調で返され、あまつさえ司令部も救けると言われてしまった

そして、その忠告が本当に場違いなものだったと

謎の戦術機がBETA共に跳び込んでいった所で思い知らされた

「なあ！！」

もの凄い速さで飛び込んだと思ったらBETA共を紙の様に切り裂き、爆発が巻き起こる

その爆発に巻き込まれてBETAの死骸も増えていく

もつと視ていたいという衝動もあったが、謎の人物（戦術機）が時間を稼いでくれているのだ

好意を無碍にしない為にも住民の退避に尽力しなければならない

彩峰 萩閣SIDE OUT

冬樹SIDE IN

本当に十分でBETA共を殲滅した俺はミラーコーティングを発動し消えるようその場を立ち去った

なんか呼び止められていたが無視だ、無視

その場での口約束だったが国連軍司令部も救援に行くと行ってしまったしな

「これが終わったら基地に帰る、絶対に！！」

はあゝ！！

自由を愛する俺が働き者なんて何か間違ってるよ

深い溜息を吐きながらも次の戦場に赴いていった

・

・

・

・

・

結果だけ言おう

撤退している国連軍司令部にたどり着いた俺はミラーコーティングをとき

BETA共の中に飛び込んだ

途中、空を飛んで殲滅していたら光線級共が狙い撃ちしてきたのでバレルロールしながら避け

布都御魂之剣で切り裂いて大爆発をプレゼントし返した

ほぼ全てのBETAを殲滅し終わると同時にミラーコーティングを再び発動しその場を去った

取り敢えず被害は出たが俺がこなった事を考えれば
確実に壊滅していた事は間違いない

後に光州作戦の裏で起こった国連軍司令部救援劇が

”「ゴースト」の奇跡”

なんて恥ずかしい呼ばれ方をする伝説を残す事になるなんてこの時の俺は思いもしなかった

冬樹
SIDE
OUT

08 光州作戦 後編（後書き）

4 / 27 編集

幕間02（前書き）

色々独自設定やオリジナル機体が出ます

幕間 02

冬樹SIDE IN

俺は月に帰ってきたー！！

という事で、長かった戦場暮らしから月基地に帰ってきた
(ステルス輸送機は大気圏突破出来ないので「ゼファー」で帰還、
勿論ステルス輸送機は隠してきたぜ)

でも基地って言うより都市だよこれ？

「「アヴァロン」格納庫」

ハンガー
格納庫に「ゼファー」を固定させコックピットから降りる

「マスター、お帰りなさい

無事なお姿を見て安心しました」

「ああ、ただいまセイバー」

定時連絡はしていたけれど

この艦の中での会話は心暖まるものがある

俺の日常だと本能に訴えかけられてるみたいだ

「セイバー、すまんが今日は休ませてもらう

報告やら何やらは明日からで頼む」

「Yesマスター

機体整備などはやっておきますので、ゆっくりと休んでください」

「そうさせてもらうよ

おやすみセイバー」

『おやすみなさいマスター』

そこそこに会話を打ち切り俺の部屋へ戻っていった

久しぶりに自分のベッドにダイブするとすぐに睡魔に襲われた

冬樹SIDE OUT

セイバーSIDE IN

マスターがお休みになって一日経過しました

今マスターを部屋に居ます（そう部屋の中に入っている、ココ重要）

さて早速起こしましょう

ユサユサ、ユサユサ

「起きませんね・・・仕方がありません、実に仕方がありませんね
っ」

私は「虎竹刀」による斬撃でマスターを起こしました
ストライク・エア

おや、強すぎましたか？ピクピクしてますね

「あがっ！、なにすんねん！！、なにすんねん！！」

起きたと思ったらキャラが変わってしまいました但問題ありません

「いや、問題あり!!、おおいに問題がある!!」

「地の文?にまでツツこんではいけませんよマスター
それと、お早う御座います」

「ああ、おはようセイヴぁ・・・ドチラサマ?」

「何を言ってるのですかマスター?

貴方が創ったAI「セイバー」に決まっているではないですか」

「(。d)・・・はああゝ!!」

フツ、いい驚き顔です

この日のためにこの身体を制作したかがあります

「セ、セイヴぁーさん、君は何を考えてるのかな?」

「勿論、マスターをからかう為です」(サポートするためです)」

「本音と心の声が逆だからツ!!」

騒がしいマスターですね

「からかうのは本気ですが?

まあいいでしょう

マスターのサポートをしやすいように生体型端末として作成した
のです」

「そおいうのは出迎えるときや定期連絡のときにでもしてくれよ」

「だが断る」キリッ

マスターは?orzとなつてしまいましたが問題ありません

サッサと食事をとって頂くため食堂に連れていきましょう

セイバーSIDE OUT

冬樹SIDE IN

「アヴァロン」食堂」

セイバーに連れられて（引きずられて）食堂にきている

食堂は、注文カウンターにテーブルと椅子が並んだだけのシンプル作りになっている

「マスターは席に着いていてください

食事は私が持ってきます」

「ああ」

セイバーは食事を受け取りに注文カウンターに行き、俺は適当な席に座った

あらためてセイバーの姿を確認する

女性というよりも少女の幼さを少し残す顔と体型に金砂の髪を青いリボンでポニーテールよりもやや下がるようにまとめている。服装は白いブラウスに青いスカートとシンプルなデザインの服を着ている（Fateのセイバーの普段着にセイバー・リリーの髪型だと思ってください）

セイバーが食事の乗ったトレイを持って戻ってきた

俺の目の前にトレイを置くと正面の席にセイバーも座った

「では」

「「いただきます」」

今日は焼き魚定食だなと思いながら食事をしていたときに

「なあ、セイバーって食事することができたんだな」

「何をモグモグ、当たり前モグモグ、前なことを言ってゴクン、いるのですか？」

この高性能な身体はフェイクな食事ではなく、食事をする事でキチンとエネルギーに変換出来ます。さらに味にうるさく大量に食べられる優れものです」

なんか自信満々に言い切りやがった

確かにセイバーのトレイを見ると俺より量が多い

「おかわりです」

アシストロイドにおかわりのご飯を請求するセイバー、しかも山盛りで・・・

もういいや、気にしたら負けだ

・
・
・

「「ごちそうさまでした」」

つつがなく食事を終え、一緒にお茶を啜っている

さて現状の確認とこれからの話をするか

「セイバー、月基地の建設状況や頼んでいた仕事の報告を頼む
定期連絡で進行状況くらいは聞いていたが

セイバー独自の行動もしていただろう？」

「流石ですねマスター

では独自行動も含めて報告します」

今まで声だけだったのに美少女の微笑みをたたえて報告するから
ついドキッとしたのは内緒だ

ゲフンゲフン、で報告してもらったのが以下のとおり

- ・月基地は予定どおり完成（偽装工作済み）
- 動力としてBETAの死骸を利用したボイドフィールドエネルギー
炉を使用
- ・PT、AM製造工場および武装兵器専用工場を増設
- ・戦術機の研究および改修プランの作成完了
- ・食料生産プラントの増設とテラフォーミング設備の増設
- ・月のG元素の回収、研究の完了

「ここからが追加報告になります」

・マスターが改修した「アルブレードMark？」15機ロールアウト

・戦術機の新OSとCPUセット「XM3」300機分制作

・戦術機用カートリッジ式ビームガン、レールガン、高周波長刀を
各100個制作

・戦術機用36mmHESH弾カートリッジ600個制作

・対BETA誘導兵器「スケープゴート」を5個制作

・100m級多次元高速輸送母艦「アマテラス」一艦ロールアウト

「それからG元素研究の副産物で人工トリウム²³⁵の生成に成功しました」

「・・・は、トリウムってあのトリウムか？」

「はい、月のG元素を1/5程触媒として使用した結果1kg程生成出来ました」

さすがにそれは予想外だった

有原動力だが同じサイズの動力炉を作れば縮退炉すら上回るエネルギーを生成する特殊金属

しかも1kgもあれば惑星一つ分のエネルギーをまかなえる量だぞ

「使うかどうかは別にしてトリウムは厳重に保管だ
危険過ぎる」

「了解しました」

「まあ、予想の斜め上に行く結果もあったが準備は万端だな
俺の方も世界にアピール出来たし」

「ではマスターは今後どのような行動を取るおつもりで？」

「日本帝国征夷大將軍 煌武院悠陽に接触して

新部隊設立と「オルタネイティヴ？」の援助を行う」

「ではまた忙しい日々になりそうですね」

こいつ俺の自由が減るのを楽しんでやがるな

はあー！！

俺から関わっちまったんだけどさ、なんだかな

「やる気がどんどんなくなってきたよ」

「頑張ってくださいマスター」

セイバーが終始良い（黒い）笑顔で、今後の活動方針の話は終わった

冬樹SIDE OUT

幕間02（後書き）

楽しんでいただければ幸いです

また随時文章の修正なども行っております

4 / 27 編集

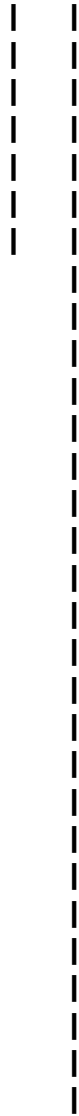
月基地とPTと独自設定

・月基地

オリジナルハイヴ跡地に主人公達が創り上げた秘密基地
ミラーコーティング技術とセイバーによる偽装工作で発見される事
はない

現在基地にはPT・AM製造工場、武器製造工場、食料プラント、
テラフォーミング技術工場、G元素研究施設、戦艦製造工場、「ア
ヴァロン」専用ドッグがある。基地を運営するエネルギー源として
BETAの死骸を利用したボイドフィールドエネルギー炉を使用し
ている

現在もアシストロイド達による施設の拡大中である



・アルブレードMark? (和名、瞬刃)

本作品オリジナル機体

R-1の量産型アルブレードをさらに改修した機体
装甲にも対ビームコート処理が施されている
どちらかというとART-1に近い武装をしている

フレーム：G2フレーム

装甲：Eカーボン

動力：プラズマジェネレーター

空中浮揚機関：テスラ・ドライブ

基本OS：TCOS

・武装

バルカン

頭部に2門内蔵

ビームソード

長刀より少し短いビームの刃を生成する。バックパック左右に装着

HG・リボルヴァー

中距離用の実弾式リボルバー。両腰に二丁装着

ブーステッド・ライフル

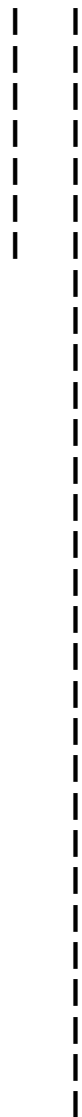
遠距離用のレールガン。3発同時に撃つ

ツイン・ビームカノン

両肩の飛行ユニットに搭載された長射程の射撃武器

ブレードナックル

両腕に装着されたチェーンソー・トンファー



・100m級多次元高速輸送母艦「アマテラス」

最大積載量がPTサイズで4機と予備パーツ程しか乗らないが、テスラ・ドライブ、プラズマリアクター、ミラーコーティング発生装置により陸海空宇での隠密運用が可能

単独での大気圏突入・突破もできる

また外部コンテナを装着することで高速輸送は出来なくなるが隠密性は維持したまま最大で20機の機体も運べる（ガオガイガーの百式司令部多次元艦スサノオの銀色バージョン）

・武装

単装レールガン

マルチトレースミサイル

爆雷

・特殊能力

ピンポイントバリア

艦全体がいつも包まれておりエネルギーが切れない限りダメージを受けない

ミラーコーティング発生器

ミラーコーティングによる光学迷彩、ECS効果で隠密航行が可能

・独自設定など

「XM3」

TC・OSを元にした戦術機用OS

新型CPUにより即応性35%アップ、先行入力・キャンセル・コンボが可能になる

36mm HESH弾カートリッジ

着弾と同時に弾頭が潰れ、第1段階の爆発が起きる。この爆発が一点に集中し、穴を開ける。第2段階の爆発で外殻を剥離させ、内部を破壊する、という2段階構造の弾。カートリッジを交換するだけで戦術機用36mm突撃砲に使用できる。突撃級であるうとも数弾撃ちこめば殺せる。だがコスト通常の弾の倍かかる

対BETA誘導兵器「スケープゴート」

ML機関（ムアコック・レヒテ機関）を搭載した設置型誘導兵器。戦術機一機だけで運べる。G元素を回収しようとするBETAの特性を利用した兵器で設置した場所にラザフォード場を半径10Mで発生させG元素が尽きるまでラザフォード場を維持する。攻撃は出来ないが飛び込んでくるBETAは容赦なく潰れる。コントロールはマニュアルとオートが可能（G弾にはならない）

人工トロニウム

月に存在するG元素の1/5を利用して生成した（1kg）特殊金属（研究の副産物）

有原動力ではあるが同じサイズ動力炉なら縮退炉すら上回るエネルギーを生成出来る

1kgもあれば惑星一つ分のエネルギーがまかなえる

09 風雲帝都城（前書き）

主人公、フラグ立てちゃったかもしれない

09 風雲帝都城

1998年5月下旬

セイバーとの今後の行動についての話し合いが終わってから、地球での活動の疲れを癒す為に一週間の休息をとった（一ヶ月って言うたら「虎竹刀」の真名開放斬撃をいただきました。すごくスゴクいたいです）

次の作戦の為に「ゼファー」で再び地球に降り立った俺は現在、日本・京都に來ている

冬樹SIDE IN

今回の作戦は日本のトップ煌武院悠陽を味方に付けることだ

正直、面会するだけなのにコソコソと潜入しなければならぬめんどうだから「ゼファー」使って將軍様攫ちやおうか（ゾクッ）やべ、ふざけたこと考えたら背筋に冷や汗が、なんか危険な警鐘がガンガンなってる。この考えは無しだナシ！！うん、真面目にやろう

（深夜・帝都城内）

僅かな灯りがそこに道がある事を示す

俺は隠密型アシストロイドと共に廊下を歩きながら目的の人物を探していた

普通は警備兵の目を掻い潜って忍びこむのだが、隠密型アシストロイドのお陰で堂々と歩いている

隠密型には、光学迷彩・無音化装置で姿を消し、また超音波索敵で人やトラップも見つけてくれる某大佐にも負けないすごい奴だ（一体につき一人が限度）

クイクイ

「見つけたのか？」

服を引っ張っていた隠密型アシストロイドに聞いてみるとコクンと頷いてくれた

「よしよし、偉いぞ」

案内してくれ」

頭を撫でながら頼むと俺の前に立ち案内を始めてくれた

・

・

・

案内をしていてくれた隠密型アシストロイドが襖の隙間から灯りの漏れる部屋の前で立ち止まり指を指していた

「着いたようだな」

索敵も済んでおり、部屋の中で一人何か仕事？をしているようだ

「お偉いさんに会ったのって緊張するな」

素早く襖を開け閉めして中に侵入

「ーッ、何者ですか!!」

急に襖が動けばやっぱり気づかれるよな

見えていない此方を睨み、警報装置のボタンを押している
でも侵入前にシステムのハッキングは終わっているので警鐘は鳴らない

「今晚は、煌武院悠陽殿」

挨拶をしながら光学迷彩を解いた

冬樹SIDE OUT

悠陽SIDE IN

政務室にて、未だ片付かない政務に没頭していると急に襖が動き出した

「ーッ、何者ですか!!」

動いた襖の周辺から人の気配感じ、睨みつつも警報装置のボタンを押しますが警鐘が鳴らないことに内心焦りつつも平静を装っていた

「今晚は、煌武院悠陽殿」

睨んでいた場所から声が聞こえたと思いましたら突然男性と忍装束のネコのようなものが現れ挨拶をしてくる

「そなたは何者ですか」

驚きを隠し、もう一度怒気を込めながら冷静に相手の出方を伺う

「あ、自己紹介がまだだったね

俺の名前は飛鳥冬樹、敵じゃないよ

てか、そんなに睨まないでよ

可愛い顔がだいなしだよ？」

「名を訪ねているのではない

何の目的でわたくしの前に現われたかと聞いているのです」

いきなり名乗り上げたと思えば今度はわたくしに向かって、か、可愛いなどと不意をつく言葉を言ってくる

けれど目的がわからぬまま油断することは出来ない

「じゃあ簡潔に

コードネーム「ゴースト」が協力しに来ましたって言えばわかる

？」

「あなたがあの「ゴースト」の衛士だと言っのですか！？」

驚きました

まさかあの「ゴースト」の名がでるなんて

しかもわたくし達に協力してくれるというのだ、驚かずにはいられない

「そうだよ。信じてくれると嬉しいけど

それは無理だと思っから信じてもらっ為のお土産を持ってきた」

「お土産ですか？」

飛鳥殿は左脇に抱えていた箱を自分の前に置いた

「本当は直接手渡したいけど一応不審者の持ち物だからね」

「いえ、そのようなことは」

「ありがとうございます」

で、中身なんだけどレールガンと高周波長刀の基礎理論

それとHESH弾っていう特殊弾の製造方法の書類にお菓子の詰め合わせです」

「……ほ、本当ですか!？」

「本当ですよ？」

悠陽殿が信用してる技術者に見せれば直ぐに解ると思いますよ？」

絶句してしまいました

さもなんでもない物の様に、もの凄い技術をお土産と嬢して提供されてしまった

「では、今夜はこれでお暇させていただきます

三日後にまた来ますので信用出来ると思ったら貴方が信用してる人も集めておいてください

後、集める人の中に香月夕呼博士は必ずお願いします」

「香月博士を、ですか？」

「ええ、理由は理解していただけたと思いますが？」

「わかりました

では三日後にお待ちしております」

少し微笑んでいたのでしょうか

飛鳥殿が立ち去る前に

「やっぱ睨んでるより笑顔のほうが悠陽殿は可愛いよ」

なんて言われてしまった
ま、また可愛いつて・・・

数十分後わたしは真耶さん呼び、事の真偽を確かめるべく動き
始めました

しかし、彼、冬樹様は信用出来ると今は理由もなくそう思っていま
した

悠陽SIDE OUT

09 風雲帝都城（後書き）

4 / 27 編集

10それぞれの思惑（前書き）

いつの間にか3000アクセス突破

応援あるがとうございます

今回も拙い文章ではありますが、楽しんでいただけたら幸いです

10それぞれの思惑

悠陽との密会が終了し、それぞれが動き出した

SIDE 1

悠陽SIDE IN

冬樹様との密会を終えて直ぐに、わたくしは真耶さんをお願いして紅蓮と鎧衣課長の招集を秘密裏におこなった

翌朝、帝都城の一室に紅蓮、鎧衣課長

そして招集の理由を知っている真耶さんが集まった

「殿下、今回の招集はどういったご理由で？」

鎧衣まで呼び出すとは余程のことでございますか？」

「ええ、実は昨晚「ゴースト」の衛士がわたくしの所に訊ねてまいりました」

さすがに紅蓮、鎧衣課長も目を見開いて驚いていた

「それは真にございましょうか？」

頷く事で紅蓮の質問が真実だと肯定する

「「ゴースト」の衛士の名は”飛鳥冬樹”様

彼は、わたくし達、日本との会談を求めてまいりました
そして”お土産”として渡された物があります

真耶さん、例の物を紅蓮に」

「は、紅蓮大将これを」

悠陽の言葉に従い紅蓮に書類の束を渡す真耶

渡された書類を読み進めていくうちに紅蓮の顔が驚愕のものに変わっていく

さすがの鎧衣課長も不審に思い紅蓮に書類の内容を尋ねた

「閣下、その書類には何が書かれているのですかな？」

「超電磁砲と高周波長刀の基礎理論と

36mmで突撃級の外殻を破るHESH弾という弾薬の製造方法だ」

驚いていた鎧衣課長にも書類を渡し内容を確認させる

全て理解出来るわけでも真実だとも言えないが”お土産”程度で渡している情報では無い

「いやはや、此れ程のものをお土産で渡すとは・・・

なんとも底が知れませんか」

「して、わしらはどの様に動けは？」

「三日後に会談を行います」

紅蓮には信のおける技術者に書類の真偽の確認を

真耶さんは五摂家当主への繋ぎを

鎧衣課長には榊首相、珠瀬国連事務次官、彩峰准将

そして香月夕呼博士を招集させて下さい」

”香月夕呼”この名前が出た途端に苦虫を噛んだような表情になる真耶

表情にこそ出ていないが紅蓮、鎧衣課長も内心ではその名前が出る

とは思っていなかった

「然しながら悠陽様

唯でさえ不審な者の言を受け入れ、招集を掛けますに
あの魔女までも呼び寄せるのですか！！」

「これは冬樹様たつての願いなのです

それを拒むわけにはいけません」

「おやめください悠陽様！！

それに不審者を様付けで呼ぶなどと！！」

「いいえ、冬樹様は信のおけるものです

私見ですが、わたくしはそう感じました」

何とか考え直してもらいたい真耶

「ほほう、殿下に此の様な態度を取らせるとは
面白い事になりそうだのう

鎧衣もそう思うであろう？」

「はっはっは、まったくですな、閣下

私も早く会ってみたいものですね」

悠陽と真耶の話が終わるまで終始ニヤニヤしっぱなしの紅蓮と鎧衣
課長

それぞれが動き出すまで少し時間が掛かったのは言うまでもないだ
ろう

悠陽SIDE OUT

SIDE 2

巖谷SIDE IN

（帝国技術廠第二開発室執務室）

唯衣ちゃんと二人で本日のスケジュールを確認していると突然紅蓮大將が執務室にお越しになった

「ああ敬礼はいらんぞ」

あまりに突然のお越しに仰天はするが、来訪の理由を聞かねばならない

「は、して紅蓮大將、本日はどのような御用で？」

「うむ、巖谷よ

貴様には、この書類に書かれている技術の真偽を確かめて欲しいのだ」

渡された書類を確認し

内容を紐解くことに俺は驚愕の表情になっていった

「巖谷中佐、その書類にはいったいどんな技術が書かれているのですか？」

「紅蓮大將、よろしいでしょうか？」

「かまわんぞ」

唯衣ちゃんにも書類を渡し確認させる俺と同じように驚いているようだ

「な、これは戦術機サイズの超電磁砲！？」

しかも我々が問題視していた必要電圧と冷却装置の技術が一気に

解決できますよ!!」

「それにこの高周波長刀の技術や、36mm HESH弾製造技術も対BETA戦術に革命を起こせるぞ」

あまりの技術に興奮したが、ふと疑問が残る

何故これだけの技術が今になって急に出てきてかということだ

「巖谷よ、その技術は使えるか？」

「ええ、実験は必要ですが確実に実現可能でしょう」

しかし、何処で此の様な技術を？」

「『ゴースト』の衛士が殿下にお土産にと渡してきたのだ」

クククツ、と笑いながら答える紅蓮大将だが、まさか「ゴースト」名が出るとは

「それで、その衛士は今何処に？」

「ぜひとも会って見たいのですが」

「三日後、帝都城で秘密裏に殿下との会合がある」

その時に貴様も来い」

「よろしいのですか？」

「かまわんよ」

技術的なことを理解出来る人員も必要だ

その副官も一緒にいいぞ」

それだけ言われて紅蓮大将は部屋から出ていかれた

興奮冷めやまぬ気持ちをおさえ、唯衣ちゃんに話しかける

「唯衣ちゃんはどう思う？」

「仕事中です、その呼び方はやめてください！」

「むっ、相変わらずかたいな」

それで篁中尉はあの技術や「ゴースト」についてどう思う」

「「ゴースト」については戦場で流れる眉唾ものの噂だと思っています」

ですが、あの技術がお土産程度で済まされるなら

危険を犯してでも「ゴースト」の協力を得るべきだと考えます」

「そうだね、唯衣ちゃん

必ず会談は成功させねばならんだろう

ああ、それと唯衣ちゃん「ゴースト」噂は全部本当だからね」

「ですから、その呼びか、た、ってえええー!!」

ほ、本当ってどうのことですか!？」

驚く唯衣ちゃんをあしらいながら「ゴースト」との会談を必ず成功させる為に思考を巡らす

この会談で、どんな未来が切り開けるかを

巖谷SIDE OUT

SIDE 3

夕呼SIDE IN

「横浜・帝国陸軍白陵基地」

執務室に入るとまた鎧衣のやつが勝手に侵入していた

「あら鎧衣課長、毎回部屋に勝手に侵入しないでくれる
それとも帝国情報省様つてのは無断侵入がマナーにでも成っているのかしら

それとアポイントメントも無しに来ないでくれる

私は、あんたらと違って暇じゃないのよね」

「はっはっは、あいかわらずお厳しいですな

博士の為に身を粉にして働いているのに

いや、これが博士なりのやさしさなのだと受け取っておきましょう」

相変わらず飄々とした顔で、イラッとくる事を言ってくる

「やめてよ気色の悪い

で、あんた私に用があるから来たんでしょ

さっさと要件を言いなさい！」

「そうですか

では、ドードー鳥の生態というのは……」

「余計なことはいいいから本題に入りなさい！」

イラつきが限界にこようというときに飄々とした態度を改め
鎧衣の奴は真面目に話しを始めた

「殿下より招集の命がくだりました

日時は三日後、場所は帝都城です」

「は、なんで殿下に呼び出されなくっちゃならないのよ？」

「いえ、実際は殿下が博士の招集を指定した訳では無いのですよ」

「じゃあ誰が私を呼び出してんのよ」

唯でさえ研究で忙しいのに態々呼び出されないといけないのかムカ
ついて私だが、呼び出した相手の名前を聞いて考えが変わった

「「ゴースト」の衛士と名乗る人物が殿下と接触し、博士をご指名
してきた次第で」

「ーッ、「ゴースト」の方から接触してきたの!？」

ほかに何か情報は無いの？」

「おお、こわいこわい

相手の名前は”飛鳥冬樹”という名前以外は解っていませんね
ああ、それに殿下はお土産をもらってましたね」

お土産という言葉に疑問を覚えた私は更に追求した

「その”お土産”ってのはなんだったのよ？」

「お菓子の詰め合わせに超電磁砲と高周波長刀の基礎理論

あとは36mm HESH弾という突撃級の外殻を破る特殊弾の製造方法ですね

いや、私もお菓子を頂きたかったですね」

「はあー！！」

そのデータは持っていないの？

あるんなら見せなさい！！」

鎧衣に掴みかかり首を上下にガクガクと揺する

「落ち着いてください博士

データいま技術廠で解析中で持っていないません」

「チツ、使えないわね

まあいいわ、データは後で届けなさい

それと殿下に招集の兼、承ったことを伝えときなさい」

「わかりました

では、そのように殿下にお伝えしておきます」

それだけ言って執務室から去っていった

「しっかし”飛鳥冬樹”ね
いい度胸してるじゃない

私を呼び寄せるなんて覚悟しておきなさい」

妖艶な笑みを携えながら思考の海に落ちていく

”飛鳥冬樹”を何としてでも手に入れようと

夕呼SIDE OUT

SIDE 4

冬樹SIDE IN

悠陽殿との密会を終えた俺は地球に残してきたステルス輸送機を回収し日本近海で待機させた

現在はステルス輸送機の通信でセイバーと話していた

「取り敢えずプランの第一段階は終了

現在第二段階に移行中だ

そっちの方ではどうだ？」

『基地の増設は概ね順調です

機体、武器、後方支援火器の制作、食料生産も予定道理です
ですが第二母艦の制作が少し遅れ気味ですね』

「母艦はしょうがない、PTとかが順調なら問題ない」

『ありがとうございますマスター』

「それと追加で頼みたいことがある」

『頼みとはなんでしょうか？』

「三日後に此方に来るときに戦術機を5体作って持ってきて欲しいんだ」

『XM3に換装したノーマルタイプですか？』

俺はここで黒い笑を浮かべて言った

「いや、戦術機モドキだな
設計データは今送る」

『・・・届きました」

しかし、ほとんどPTですよこれは？」
「問題ないよ」

『戦術機モドキは最優先でいいのですか？」

「ああ戦術機モドキを優先してくれ」

『了解しました」

それともう一つ「パラディン」の調整が完了しました」

「お、マジで！？」

それじゃあ「パラディン」も一緒に持って来といて」

「了解しました」

ではマスターあまりハメを外し過ぎないでください」

「了解、よろしく頼むな」

通信を終了しフーッと息を吐く

三日後には全てが決まる

今は出来ることをしながら静かに時が過ぎるのを待った

冬樹SIDE OUT

10それぞれの思惑（後書き）

次回は長編です

4 / 27 編集

11 新たな未来が刻まれて（前書き）

今回は長文になっています

楽しんでいただけたら幸いです

11 新たな未来が刻まれて

深夜の帝都城

普段なら警備の人間以外は寝静まっている時間帯

だが、今日だけは違った

謁見の間に集まるのは征夷大將軍 煌武院悠陽を筆頭に彼女が信をおく者達

けれども今夜の主催者で主役は煌武院悠陽では無い

「ゴースト」を操る衛士が、真の主催者にして主役

そして、この日の話し合いは、日本帝国の未来ではなく
今後の世界の未来を決める話し合いになる

悠陽SIDE IN

時間は深夜ですが謁見の間には多くのものが集まっています

香月博士をはじめ多少の人員の違いを覗けば前回の「ゴースト」対策時と同じ者達の集まりです

けれども今夜は一人の人物の到着を待っています

彼の名は”飛鳥冬樹”様

三日前にわたくしに協力を持ちかけた「ゴースト」を操る衛士

周りの皆は冬樹様が来ないことに不安や騙されているのではという
疑心暗鬼にとらわれ、騒いでいるようですが、実際に会ったわたく
しは冬樹様が必ず来ると確信しておりました

「皆の者

殿下の御前であるぞ、少しは落ち着かんか!!」

騒がしかった周りを鎮める紅蓮の一括

「しかし殿下、皆が不安がるのも分かります

「ゴースト」の衛士は本当に来るのでしょうか？」

「ええ、必ず来ます」

皆の不安を代弁する紅蓮にわたくしは確信を持って答えた

「実際に彼の者と会ったわたくしにはわかります

あの時の彼の物の言葉に嘘はありません」

——悠陽殿にそこまで信じてもらえるとは嬉しい限りですよ——

突然、目の前にある今夜の主役が座る席から声^{ゲスト}が放たれる

「ッ、何者だ!!」

真耶さんがわたくしを守る為に前出る

——姿を見せるから皆さん驚かないでね——

騒ぎの中、二日前の様にお供の忍装束の猫(?)を連れてその姿を

現した

悠陽SIDE OUT

冬樹SIDE IN

「実際に彼の者と会ったわたくしにはわかるます
あの時の彼の物の言葉に嘘はありません」

——悠陽殿にそこまで信じてもらえるとは嬉しい限りですよ——

前回と同じように隠密型アシストロイドに光学迷彩を展開してもらい、謁見の間に訪れていた

訪れたときに丁度俺の事を悠陽殿が説明していたらしく嬉しくなつて声をかけた

「ッ、何者だ!!」

姿を消したまま喋ったので悠陽殿のボディガードらしき女性が前に出て彼女を守っている

——姿を見せるから皆さん驚かないでね——

とは言ったものの絶対慌てるだろうことを確信しつつ光学迷彩を解いて姿を現した

やっぱり俺が現われた瞬間に周りが騒ぎ始めた
やれ「いったい何処から?」だの「殿下をお守りしろ」だの

取り敢えずは騒ぎが収まるまで喋らないほうがいいだろう

「皆、静まりなさい

真耶さんも大丈夫ですから」

「しかし殿下！！

此奴はいきなり現れました

何処に何を仕掛けているか分かりません！！」

「大丈夫です

冬樹様は信頼できるお方ゆえ」

「しかし・・・わかりました」

悠陽殿の凜とした命令に皆さん静かになっていく

ボディーガードの人も悠陽の後ろに下がってくれたけど、ずっと此方を見続けて、呪詛でも掛けれるくらい睨まれ続けた

こわいです（（（；。Д（（（ガクガクブルブル

「三日ぶりですね、冬樹様」

「今晚は、悠陽殿

三日ぶりですね

それと、他の皆さんは初めましてですね

今日皆さんに集まって頂くようお願いした飛鳥冬樹です
よろしく願います

それで悠陽殿は何で俺を様付けで呼ぶんですか？」

「わたくしがそう呼びたかったからです

冬樹様もどうか”悠陽”と呼び捨てで及びください」

「わかった？、悠陽ど、じゃなかった悠陽

俺も様付けじゃなくて呼び捨てでいいぞ」

「悠陽・・・悠陽・・・悠陽・・・」

「貴様！！

殿下に対して無礼な口を！！

あまつさえ殿下を呼び捨てだと！！
・・・殿下もしっかりして下さい！！」

呼び捨てでいいって言われたのにボディーガードの人が怒ってます
ます睨まれた

「・・・ハッ、いいのです真耶さん」

「しかし、殿下！！」

「真耶さん」

「は、失礼しました」

此方を睨んだままだけど何とか引いてくれたみたいだ

「では、冬樹様

あらためてお聞きます

冬樹様は何者ですか？

何の目的があつてわたくし達に協力をしていてだけるのですか？」

全員が俺の方を見て俺の答えを固唾を飲んで待っている

「今此处で説明するよりも俺と一緒にある場所に付いてきてほしい
そこで全てを話したほうが信じるだろうし、俺の目的も説明しよ
う」

「貴様っ！！」

悠陽はボディーガードを手で遮り話を続ける

「そこに行くまでにどれ位の時間がかかりますか？」

「外にステルス輸送機を待たせてある

乗り込めば１０分もあれば着くぞ」

「・・・わかりました
では参りましょう」

少し考え込んでいたが悠陽は立ち上がり俺に付いて行こうとする
が周りの者の反対や、まだ信じていない者達の説得で輸送機に乗る
までに少しばかり時間がかかった

冬樹SIDE OUT

夕呼SIDE IN

私を呼びつけた”飛鳥冬樹”って奴はいきなり姿を現した

変な忍装束の猫(?)を連れた巫山戯た奴ではあるが、この場で使
われた個人に使用できる光学迷彩技術だけでも高い技術力を持つて
いることがわかる

「今此处で説明するよりも俺と一緒にある場所に付いてきてほしい
そこで全てを話したほうが信じるだろうし、俺の目的も説明しよ
う」

奴は私達をどっかに連れていきたいみたいで殿下に交渉している

他のバカ共は殿下にいつてほしくないみたいだけど冗談じゃない

私はなんと言われようとして行くわ

たとえ危険でも協力が得られれば「ゴースト」を戦力に出来るかも
しれない

それに「ゴースト」の技術の中に00ユニットのヒントがあるかも
しれない

輸送機に乗り込むまで、私は知的好奇心を抑えながら”飛鳥冬樹”や、奴に提供させる技術について考えを巡らせ続けていた

夕呼SIDE OUT

冬樹SIDE IN

ステルス輸送機に乗るまでに色々反対する奴らがいたが、悠陽が説得してくれたお陰で最終的には”渋々乗ってやるがおかしなマネしたらどうなるか分かってんだろなコラッ”みたいな感じで搭乗してくれた

意外だったのは、朝鮮半島の戦いで助けた彩峰准将が居て、俺に礼をいつてきたのだ

お礼を言われた俺は、さすがに照れて、顔を赤くしていた

現在は、帝都城上空に待機させていた「アヴァロン」の格納庫ハンガーに収容されて降りる処だ

「皆さん目的地に着いたので降りてください」

「あの、冬樹様

本当にもう着いたのですか？」

ステルス輸送機に乗り込んでから僅か10分程しか経ってないので悠陽や他の皆さんも不安に思ったのだろう

「大丈夫ですよ、降りれば直ぐにわかります」

それだけ言ってステルス輸送機のハッチを開放し降りてもらった

「此処は？」

それにあの機体は「ゴースト」じゃない！！

飛鳥、教えなさい此処はどこなの！！

それに、あの機体についても言いなさい！！」

降りた場所が「アヴァロン」の格納庫^{ハンガー}の為、そこに鎮座した「ゼファ―」を見て興奮した香月博士が襟首を掴んでガクガク揺する

他の皆さんもこの場所や「ゼファ―」を見て驚いたり興奮したりしているようだ

「く、くる、し、しい、説明します、か、らやめて」

「香月博士、おやめください冬樹様のお顔が青くなっています！」

「あ、殿下、失礼しました

で飛鳥、此処はどこか説明しなさい！」

悠陽が止めてくれなかったら好奇心に負けた香月博士に殺されていたかもしれない

取り敢えず押さえてはくれたが目は獲物を狙う肉食獣のままだ

「し、死ぬかと思った。悠陽助かったよ」

「いえ、お気になさらないで下さい」

「そんな事はどうでもいいから早く説明をしなさい！！」

「まあまあ、落ち着いてください香月博士
今からブリッジに向かいます

そこで全てを話しますよ

此処がどこで、今いる場所がどこなのかを
そして、俺の事や目的についてもね」

「ブリッジ、つまりは何かの乗り物ってコトね

まあいいわ、早くブリッジに行くわよ！」

興奮する香月博士を宥めながらブリッジに向かった
まあ興奮していたのは他の皆さんも同じだったけどね

ブリッジに向かう途中でも「ゼファー」について聞いてきたり、働
いていたアシストロイドに目を奪われたりして大変だった

・

・

ブリッジにたどり着くとセイバーが出迎えてくれた

「おかえりなさいマスター

そして皆様もようこそお越しくございました」

微笑みながらのセイバーの挨拶に何人か見惚れていたようだ
が仕方ないことだろう

ただ悠陽が俺に黒い笑顔を向けるのはナゼデショウカ・・・？

「さあ飛鳥、目的地まで着いたんだから話してもらおうよ」

香月博士の言葉で全員の視線が此方に向き静まり返る

俺はセイバーに合図を送り話し始める

「では改めて説明しましょう

此処は宇宙戦艦「アヴァロン」のブリッジ

現在位置は地球衛星軌道上をステルスモードで飛行中

俺はこの艦の艦長でセイバーがこの艦の人型メインコンピューター
そして俺達の正体は平行世界の人間だ」

説明の途中でブリッジの窓を覆っていた防御隔壁が下がり外の景色を見せる

あまりの事で静まり返っていたが香月博士の笑い声でまたブリッジが騒がしくなる

「あゝははっはっ、いい、いいわ、サイコーじゃない飛鳥
まさか知らず知らずのうちに宇宙にまで上がっているなんて
それに宇宙戦艦？、アメリカだって移民船作るだけで四苦八苦し
てるのに

これだけの技術力があるんなら超電磁砲ごときの基礎理論をお土産をポンつと渡せるはずよ」

何かツボにはまった香月博士が思いつきり笑った後、他の皆さんも興奮は冷めていないだろうが冷静に考える位までには戻っていた

「で、あんたは何が目的で日本政府や私に協力するわけ？
言っちゃー何だけどあんたに利益は無いし、協力する義理もない
でしょう？

何で平行世界に来たかは知らないけど、その為の研究なら私だけに接触すればいいわけだし？」

「さすがは「因果律量子論」の香月博士
俺も論文は読ませて貰いましたが興味深いテーマでしたよ」

「飛鳥、あの論文が理解できるの！？」

「量子論の研究はやってましたしね

大筋の理論は理解できますよ

でも、そういう話は後でしましょう

今は俺の目的を知ることが先でしょう」

「チッ、あとで絶対協力しなさい！」

自分の理論を理解できる者に会えたのに今はその話が出来ないのが残念なのか少しイラついているようだ

「では、冬樹様は何故協力してくださるのか？
どんな目的があるのかをお教えください」

今まで静観していた悠陽も冬樹の協力理由や目的を聞き出す

悠陽の言葉に頷いて冬樹もまた語り始める

「香月博士の言うとうり、救けたり協力する義理は無いし、大切な物も地球あてこには無い」

「でしたら！！」

「でもね、違うと分かっているても地球だし、同じ人間が住んでいる地球ほじだから

それに救けられる力があつて救けられるのなら助けようと思ちやつたのさ

だから救けるのは自己満足

協力するのは、俺の理想とする救われ方をして欲しいからあなた方を巻き込んだのさ」

「それでも冬樹様はわたくし達を救け、協力してくれるのでしょうか
ならば私達は冬樹様に感謝をしなければなりません

そなたに感謝を」

悠陽の感謝の言葉に照れて赤くなつた頬をかく

「ふゝん、下手に善意を振りまく奴よりはましね
それで、目的の方もさつさと話さない！」

息を吐き今度こそ目的を話し始める

「じゃあ目的を話します

B E T A から人類を救うため日本帝国には俺専用^にに征夷大將軍直属の対外派遣部隊の設立をしていただきたい

そして最終的には地球圏絶対防衛網の構築と火星までの奪還です
その為の技術提供や物資・食料支援、テラフォーミング技術

世界各国、特にアメリカの裏情報を提供しましょう

あと、これが一番重要な事ですが B E T A の生態に関する情報を提供しましょう」

皆一様に絶句してしまった

冬樹 S I D E O U T

悠陽 S I D E I N

「じゃあ目的を話します

B E T A から人類を救うため日本帝国には俺専用^にに征夷大將軍直属の対外派遣部隊の設立をしていただきたい

そして最終てきには地球圏絶対防衛網の構築と火星までの奪還です
その為の技術提供や物資・食料支援、テラフォーミング技術

世界各国、特にアメリカの裏情報を提供しましょう

あと、これが一番重要な事ですが B E T A の生態に関する情報を提供しましょう」

今さらながら絶句してしまいました

この艦^{ふね}に来てからどれだけ驚かされたでしょう

目的のスケールの大きさもさる事ながら果ては B E T A に関する情

報まで持っているとは思いませんでした

「ちょっと待ちなさい!!」

飛鳥、あんたBETAがどういう生態か本当に知っているの!？」

香月博士の言葉に絶句していた皆も再び冬樹様の言葉に耳を傾ける

「本当ですよ

その為に”第四計画”の責任者である香月博士にも協力してもらう為に此処に喚んだんですから」

「ーッ、そうだったわね。今更あんたが何知っていてっも不思議じゃないわね

いいわ、BETAについて教えなさい!」

「それはまだ出来ません」

「なんでよ!!」

まさか今更嘘でしたとでもいうつもり!!」

「違いますよ

俺はまだ悠陽や政府関係者の皆に応えてもらっていない

確かに協力するとは言った

だけどそれは俺の目的を必ず達成するという契約を交わしてもらう事になる

それでも良いというなら協力しよう」

冬樹様の言葉に皆を見渡します

「殿下、我ら一同殿下のお言葉に従うまでです
なに少しばかり大変になるだけでしょって、わははは」

紅蓮の言葉に皆わたくしを見て頷いてくれます

「わたくしは良き臣に支えられた幸せものです・・・
冬樹様、契約を交わします
どうか我らの力になっていただけますか？」

わたくし達の答えを聞き、冬樹様は頷いてくれた

「契約を交わしましょう

目的を達する為あなたの剣ツバキとなりましょう
・・・よろしくね悠陽！」

差し出していたいた右手をわたくしも両手で握り返しました

「こちらこそ不束者ですがよろしくお願いします」

冬樹様のお顔が赤くなり、わたくしの顔も赤くなるのを感じます

「くくく、よかったですな殿下、良き人に巡り会えて」

「貴様、悠陽様から離れる！！」

「はいはい、イチヤつくのは後にしてBETAの事や今後について
話してちょうだい」

紅蓮に詠われ、真耶さんがわたくしと冬樹様を引き離し、香月博士
が話を進めていく

やっとこの世界に光明が差してきたと思える出来事でした

悠陽SIDE OUT

こうして無事に、日本帝国と香月博士とは契約を交わすことに成功
した

月のBETAを滅ぼした事はさすがに黙っていたけどBETAに関する全ての情報を開示したら一様に怒りを顕にしていた。けれどもこの情報だけでも”第五計画”に対する牽制になるし”第四計画”の成果で色々出来ると香月博士は喜んでいた

また技術、物資、情報などの提供も各関係者から大いに喜ばれた

PTや戦術機モドキを今ある分渡すと言った時など紅蓮大将、月読大尉、巖谷中佐、香月博士がどれを何方にどれだけ渡すか交渉しまくっていたし、アメリカの情報渡したときは特に黒い笑顔の榊首相、香月博士が降臨していた。余程腹に据えかねていたのだろう

最後の方では時間が無くなり、今後の対応は「アヴァロン」で使用している今の地球の技術では盗聴不可能な通信機を全員に持つてもらってその日の話し合いは終了となった

11 新たな未来が刻まれて（後書き）

4 / 27 編集

外伝01 「ゴースト」の軌跡（前書き）

何時もご覧いただきありがとうございます

何時のまにか総合 PV10万・ユニークアクセス1万を超えていました

皆さんありがとうございます

さて、今回の外伝ではマブラブオルタネイティブThe Euro Frontに登場する三人娘

イルフリーデ、ヘルガローゼ、ルナテレジアを登場させてみましたがThe Euro Frontの情報が少なく、名前だけのオリキャラ化してしまっています

今回も皆様に楽しんでいただければ幸いです

追記、三人娘の任官は2000年からでした

名前を変更しようとも思ったのですが、もうオリキャラとして扱おうと思います。ご迷惑をおかけして申し訳ございませんm（――）

m

外伝01 「ゴースト」の軌跡

これは世界に「ゴースト」の名を知らしめる最初の戦闘記録

1998年1月

スエズ運河防衛ラインにてBETAのアフリカ大陸大規模侵攻が確認される

アフリカ大陸進攻を阻止するためにドイツ・フランス欧州連合軍、国連軍によるBETA殲滅が開始された

開戦頭初、ドイツ・フランス欧州連合軍に配置された数台の先行量産機「EF-2000 タイフーン」とスエズ運河防衛用に配置されていた「ラファール」100機による第三世代機の活躍によりアフリカ大陸への進攻を食い止めることに成功していた

しかし、昼夜問わず物量で侵攻するBETAの進攻は、時間と共に欧州連合軍・国連軍側の戦力を削り、少しずつ戦線を下げる結果となってしまった

そして、欧州連合軍・国連軍の増援も間に合わず、アフリカ大陸での殲滅戦に切り替わろうとしていた時にそれは姿を現わす事となる

三人称SIDE IN

BETAがアフリカ大陸侵攻の為、スエズ運河防衛ラインに進行してきてから4日が経過した

頭初は、最新鋭第三世代機のお陰で何とかBETAの進攻を阻止し続ける事が出来た

だが、圧倒的な物量と昼夜問わず、疲れを知らないBETAの進攻に友軍部隊の壊滅と戦線の低下を余儀なくされた

現在、私——イルフリーデ——を含めヘルガローゼ、ルナテレジアの三人しか居なくなつた部隊でBETAとの交戦が続けている多くの仲間を失いながらも今現在も戦線を維持できたのは、私達の乗る機体が第三世代先行量産機「EF-2000 タイフーン」のお陰と言えるだろう

今なお前方から迫り来る突撃級・戦車級・要撃級を噴射跳躍で左右に散開し平面挟撃による36m突撃砲の弾幕で紫色の血の雨を撒き散らせ、近接戦闘斧槍フリーゲルベルデによる斬撃で異形なる存在達の断末魔を撒き散らしながらBETAの殲滅をし続けた

・
・
・
・
・

戦闘を始めてどれだけの時間が過ぎただろうか

攻め込んでいたBETAを尽く屠り続け、ようやくこの戦域でのBETA殲滅を成し遂げた

それでも別の戦域では未だにBETAの進攻が続いており、終わった訳ではない

次の戦いの為に今のうちに補給と休息を取るために私は作戦司令本部へと通信を入れ、許可を仰ぐ

「——此方、西独陸軍第44戦術機甲大隊第2中隊第3小隊所属イルフリーデ少尉よりHQへ

この戦域でのBETA殲滅を完了しました

私たちはこれより補給の為、一時戦線を離脱します

許可をお願いします」

《——H Qよりイルフリーデ少尉へ

戦線の離脱を許可します。補給が済み次第、次の指示を仰げ》

「——了解しました」

無事に戦線への一時離脱と補給の許可が降り、私達は動き出す

「——ローテ12より各機へ

補給の為、戦線への一時離脱の許可が降りた

ヘルガ、ルナ、今のうちに弾薬、推進剤と機体損傷度のチェックと報告を」

「——ローテ6よりローテ12へ

此方はもう弾薬と推進剤が底を付きそうだ

機体の方は外装の損傷こそ少ないが各関節部の損耗が限界に近い」

「——ローテ10よりローテ12へ

此方はまだ弾薬と推進剤に余裕がありますし、機体の損耗もまだそれ程ひどい状態ではありません

イルフリーデとヘルガは先に補給を済ませてください。その間は私が周囲警戒をしておきますわ」

「——ローテ12より各機へ

私の方も弾薬や推進剤が底を付く以外は機体の損耗だけで済んでいる

補給コンテナまで戻り次第、ヘルガ、私、ルナの順に補給と応急修理を行う

各自の補給が終わるまでは周囲警戒態勢のまま休息をとるぞ」

「「——了解」」

私たちは補給コンテナを設置した後方まで下がると周囲警戒態勢のまま補給と休息を開始した

全員の補給が終わる頃には戦闘の緊張感こそ薄れてはいないが、休

息が取れたことにより体力と集中力を取り戻す事は出来た
後は作戦司令部からの指示を仰ぎ、次の戦場へと駆け出すだけとな
った

だが、突然鳴り響く緊急通信で事態は動き出す

《——HQより各部隊指揮官に通達、現在、師団規模BETA群
によるスエズ最終防衛ラインを進行中、またBETA群 後方に光
線級100、重光線級40を確認。支援攻撃を行うために速やかに
これを排除せよ。繰り返し、支援砲 撃を行うために速やかに光線
級、重光線級を排除せよ》

通信内容を聞きながら小型パネルを操作し、戦域情報連結データリンクを行い友
軍の位置情報やBETA進軍位置と速度を確認していく

だが、解った事といえば私達が現在進軍中のBETAの一番近くに
おり、それ以外の部隊は未だ他のBETAとの戦闘中で進攻を阻止
することが出来ないという最悪の展開だ
だけど、此処で諦めるなんて絶対に出来ない

「——ローテ12より各機へ

みんな、聞いてのとうりよ！

今動ける部隊は我々三人しか存在しない

けれど、BETA全てを殲滅する必要はない。光線級さえ殲滅出
来れば後は味方の支援射撃で殲滅できる」

「——ローテ6よりローテ12へ

なに、我々三機も入れば光線級くらい片付けるのは訳ないさ」

「——ローテ10よりローテ12へ

「EF-2000 タイフーン」と私達の実力なら難しい任務
じゃないですか

光線級さえ倒せば後は楽な任務ですわ」

全員、今の状況を理解している。たった三機で師団規模のBETA群に飛び込み光線級を狩り尽くせというのだ

確実に仲間の誰かが、否、全員が死ぬと分かりきっている

それでも私達が任務を遂行しない理由にはならない、諦める理由にはならない

少しでも多くの命を、人類を守るために私達”衛士”が存在するのだからだと

「——これよりNOE（匍匐飛行）を慣行しBETA群に突入する
目標は光線級の排除のみ、他には一切構う必要なし」

「——了解」

三機の戦術機は轟音を響かせながら空へ飛び出す

むかう先は師団規模のBETAが待ち受ける地獄への入り口

・

・

・

・

BETA群との遭遇にそれ程時間はかからなかった

まるで赤い大地が移動しているようにあたり一面にはBETAしか存在しない

次の瞬間、コックピットからレーザー照射警報が鳴り響き光線級に狙われている事を知らせる

「ーッ、乱数回避！！」

空に、今まで居た空間に複数の光線が襲いかかってくる

レーザーを乱数回避で避けたものの、着座地点には戦車級BETA

が多数存在している

それをとっさの判断で36mm突撃砲をばらまきながら無事に着座地点を確保すると同時に光線級に向かって水平噴射跳躍を慣行し光線級の所まで一直線に向かっていく

ホライゾンナルフイスト

「——エンゲージ、FOX3!!」

「——エンゲージ、FOX3!!」

「——エンゲージ、FOX1!!」

迫り来る戦車級や要撃級の隙間を縫うように、最小限の攻撃で前へ前へと進んでいく

だが波のように迫り来るBETAをかき分けながらの移動は遅々として進まず、横一列に並んだ突撃級の突撃に遂に足を止めてしまうこの当時の戦術機の機動には上の飛んで攻撃を避けるという動作は存在しないため、必然的に左右か後退しかない。結果、左に避けるものの退路を塞ぐ戦車級と要撃級の殲滅に手間取り、ルナテレジアの戦術機が左腕の肩から吹き飛ばされ、その勢いで一気に後方に吹き飛ばされる

「——ルナ!!」

「——ッ、マズイ、戦車級に取り付かれるぞ!!」

二機の戦術機は吹き飛ばされたルナテレジア戦術機の所まで後退し、36mm突撃砲をバラ巻きながら今まさにルナテレジアの戦術機に取り憑こうとする戦車級を一気に殲滅する

「——ルナ、無事か!!」

「——ルナ、返事をしろ!!ルナ!!」

近づいてくるBETAを36mm突撃砲や近接戦闘斧槍で捌きなが

フリーゲルベルテ

らルナテレジアのバイタルを確認する

「——こちらローテ10

すいません二人とも。私は大丈夫ですが今の攻撃で機体が動きません」

どうやらルナテレジアは少しコックピット内で身体を打ち付けた程度で済んだようだが戦術機のほうがイカれたらしい

「——ルナ、機体をバイルアウトして此方の機体に移れ

ヘルガはルナが此方に移るまでのサポートを！」

「——了解、手早く頼むよ」

「——ダメです二人とも！！

私はもう足手まといです！！

二人は早く光線級の殲滅を！！、時間がありません！！」

ルナテレジアをイルフリーデの機体に移そうとするが、それを拒否し光線級の殲滅を優先しろというルナテレジア

「——しかし！！」

「——お願い、イルフリーデ、ヘルガ！！

私に構わず先に行って！！」

「——クッ

すまない、ルナ

行くぞイルフリーデ！！」

「——ルナ、諦めないで！！

おねがいよ、ヘルガも待って！！」

ルナテレジアの願いを聞き届け、先に行こうとするヘルガローゼ救けることを諦めず、二人を説得するイルフリーデ

だがBETAは三人を逃がすことを許さない
突然BETAは左右に別れ、モーゼの十戒のごとく道を開ける

「——しまった!!」

「——退くぞ、イルフリーデ!!」

「——二人共、早く逃げて!!」

けれど、もう遅かった

光線級、重光線級の瞳が禍々しく赤く光り、次の瞬間には前方は激しい光に埋め尽くされる

「——えっ」

突然、後方上空から弾丸のように飛来して来た”ナニか”が三機の戦術機の前に降り立ち、光線級から放たれるレーザーを防いでいた激しい光がようやく収まり、前方にはレーザーを防いだ”ナニか”をようやく何であるかを認識できた

「——う……そ、戦術……機？」

「——なん……で、」

「——戦術機？、カッコイイ」

レーザー照射された大地は溶解し赤黒く変色しながら煙を上げていたが、目の前にいる戦術機とその後方に居る私達の所だけは避けるように何の変化もない

何故、助かったのか解らない私達は、呆然としながら目の前の戦術機の後ろ姿を見ながら思い思いの言葉を紡ぐしかなかった

三人称SIDE OUT

冬樹SIDE IN

地球に降りて早々に大量のBETAと三機の戦術機を発見する
突然BETAが左右に分断し、三機の戦術機に光線級のレーザーが
放たれようとしていた

「ッ、まずい!!」

上空に居た俺は「ゼファー」のミラーコーティングを解除し弾丸の
ような速度で三機の戦術機の後方から降り立った
次の瞬間にはレーザーが放たれ、「ゼファー」と三機の戦術機を襲
うが、「ゼファー」はグラビティテリトリで、後方の戦術機は
両肩に装備された8枚のホロニックスールドビットを展開しレーザ
ーを防ぐ

光線級から放たれていた光が収まり、展開していたホロニックス
ールドビットを両肩に戻す

「ふう、どうやら間に合ったようだ」

後方の戦術機は動かないがレーザー照射は防げていたので問題ない
と思いツイン・マグナライフル左腕に持ち円を描く様に三機の戦術
機の周辺に居たBETAを尽く薙ぎ払っておく

「取り敢えずこれで大丈夫だろう」

ツイン・マグナライフルから放たれたレーザーとレールガンの同時
速射砲撃の余波で周辺に居たBETAを殲滅した

其れだけの攻撃をおこなった俺をBETAは見逃すはずもなく三機

の戦術機を無視し、最優先で襲いかかってくる

「さあ、人類反撃の狼煙を上げようか!!」

布都御魂之剣を抜き、一気に上空に飛び、前方の光線級から屠りに行く

勿論、光線級に向かう途中、真下に居るBETAにはツイン・マグナライフルとマルチトレースミサイルを爆撃機の用に打ち込み物凄い勢いで殲滅していく

だが、空を飛んでいる此方をBETAが見逃すはずもなく、最照射可能となった光線級から次々とレーザーが照射されていく

「そんな攻撃食らうかよ!!」

レーザーが当たる瞬間、下に、上に、左右にとジグザグに避け、さらにバレルロールしながら重光線級に一気に接近した

「吹き飛ばー!!!」

布都御魂之剣のボイドフィールド効果で重光線級一体を唐竹割りにし、急いでその場を離れる

次の瞬間には、布都御魂之剣で唐竹割りにした重光線級が爆弾のように弾け、周りに居た光線級、重光線級全てを巻き込んでいった

冬樹SIDE OUT

三人称SIDE IN

私達の前に現われた謎の戦術機はいきなり此方に振り向き、突撃砲を発砲してきた

「――なあ――！！」

けれど放たれた弾丸は私達に当たることではなく、私達の周りに近づいていたBETAを尽く殲滅していった
しかも放たれた弾丸は弾では無く

「――うそ――！！」

「――レーザーだと――！！」

「――それだけじゃありません

あれはレーザーとレールガンと同時に発射してますよ――！！」

そう、あの戦術機はまだどの国でも実用化されていないレーザー兵器とレールガンを同時に発砲しているのだ

斉射が終わると、私達の周りに居たBETAは殲滅され、それ迄私達に向かっていたBETAが一気に謎の戦術機に襲いかかってくる

だが謎の戦術機は腰に佩いた剣を抜き、空に飛び上がった

「――馬鹿な――！！、死にたいのか――！！」

「――正気か――！！、あの戦術機は――！！」

「――やめてください――！！、死んでしまいますわ――！！」

オープンチャンネルを開き、謎の戦術機に呼びかけるがまるで応答しない

その間にも爆撃機のようにミサイルやレーザー兵器、レールガンを

斉射しものすごい勢いでBETAを殲滅し続ける

「——マズい、急いで降りろー!!」

レーザー照射警報がコックピットに鳴り響き、光線級のレーザーが謎の戦術機に放たれようとしたのが分かり急いで降りるようと叫ぶが間に合わず、謎の戦術機に向かって放たれてしまった

「——なァ!!」

もう何度度肝を抜かされただろうか、謎の戦術機はレーザーを避けたそれどころかレーザーを避けつつ真下に居るBETAへの攻撃を付けていた

そして重光線級が放ったレーザーをバレルロールで避けながら接近すると右手に持っていた剣で重光線級を唐竹割りにし、大爆発が起こる

「——キャー!!」

もう何が何だか解らなかった

たった一体の重光線級を切り捨てた次の瞬間、轟音と爆風を撒き散らし、全ての光線級、重光線級を殲滅してしまった

「——」

私達はもう見ているだけしか出来なかった

光線級を排除してからは、また上空に浮かんで爆撃機のように攻撃を繰り返した

二万は居たであろうBETAの大群がたつた一機の戦術機によって僅か30分程の時間で殲滅されてしまった

BETAの殲滅が終わると一度此方に振り返りまた何処かに行こうとしていた

「——まって!!、その戦術機!!、止まりなさい!!」

助けてもらったお礼が言いたかった、どこの軍が聞きたかった、もし叶うなら私達の仲間になって欲しかった
様々な感情が入交って呼び止めたが無駄に終わった

「————なあ!!」

もうあの戦術機には何度驚かされるのだろう
突然金属の固まりのようにその色を変えていきながら姿が見えなくなってしまった

「——ルナ、ヘルガ、あの戦術機の機体反応ある?」

「——此方には何の反応もない」

「——駄目ですね、完全に消失していますわ」
ロスト

謎の戦術機が居た上空を呆然と眺めながらこの後の報告をどうすれば良いのかと頭を悩ませることになった

後にこの防衛戦でBETAの反応が確認されては突然消失する事件が起こるが、謎の戦術機に出会ったのは、私達しか存在しなかった

そして謎の戦術機はこの日を堺に世界中のBETA戦線で姿を現し、世界中が謎の戦術機を探索、鹵獲命令が秘密裏に出る事となる

そうコードネーム「ゴースト」と名づけられて

三人称SIDE OUT

外伝01 「ゴースト」の軌跡（後書き）

今回の外伝は戦闘シーン多めで頑張ってみました。が、力不足感が否めない（ノ―；）

話は変わりますが、暫くの間、今まで投稿してきた作品の誤字、脱字が多いとの指摘があったため、大改修をしようと思います。

改修作業が終われば、新展開への構図は出来ているので、直ぐに投稿できると思います。

それでは皆様また会いましょう。

4/27 編集

12 新部隊結成 前編（前書き）

過去作品の大改修も無事終了しました
今回から新章突入です
それでは楽しんでください

12 新部隊結成 前編

日本帝国との交渉が無事成功し俺は日本の戸籍と征夷大將軍 煌武院悠陽直屬部隊（所屬と部隊名は暫定）飛鳥冬樹特務少佐の地位を貰うことになった（ちなみに赤の近衛服を着ている）

そして新部隊も設立し新たなステージの幕が上がる

冬樹SIDE IN

あの交渉から二週間が経過した

日本帝国での地位や征夷大將軍直屬の新部隊設立

P Tや新OS「X M 3」の教導や帝国に戦術機を卸している関連会社に新技術の提供など、ハッキリ言って忙しい

またアメリカの影響がある為「ゼファー」使用禁止は勿論の事、秘密裏に行うのが更に疲れる

俺の自由を返したくれ〜と叫びたくなる日々である

〜帝国技術廠・実験部隊秘密演習場〜

今日は部隊訓練と、暫定だった所屬と部隊名の報告に巖谷中佐の所に訪れている

俺は今、演習場を眺めながら巖谷中佐に所屬と部隊名の報告、P Tや「X M 3」について話し合っている

「正式に所属と部隊名が決まったそうだね
おめでとう」

「ありがとうございます、巖谷さん」

礼を言いながら握手を交わす

「で、その所属名と部隊名というのは？」

「あゝそれなんですけど」

まだ部隊のみんなに報告してないんで部隊の訓練が終わってから報告させてください」

「何だ、部隊の人間は、まだ知らないのか？
それなら仕方ないな」

苦笑しながら俺はそう答えると巖谷さんは納得してくれて話は「X
M3」などの話になっていく

「それにしても冬樹君が持ってきたPTや戦術機モドキの「不知火・
改」も凄かったが

新OS「X M3」はどの戦術機も載せ替えるだけで35%も反応
速度が上がるとは

相変わらず冬樹君の持つ技術は凄まじいねえ」

ちなみに正式な場以外は階級に関係なく名前で読んでもらっている
勿論相手によつては気軽に呼んでいる

巖谷さんもその中の一人だ

「いえ、戦術機自体のスペックにOSやCPUが追い付いていなか
っただけですよ

今まで眼に見えるハード面は進化が早かったみたいですけど
ソフト面になると誰も手を付ける余裕が無かったんでしょう

それを「X M 3」が戦術機本来のスペックにしているだけですよ
それにO Sは元々P T用のものを戦術機用にただけですし」

「謙遜することは無いよ」

このO Sだけでも世界に広がれば、今まで以上にB E T A戦闘の
死傷者の数が激減するよ」

「そう言っていたければ幸いです」

しかし「X M 3」も使いこなせなければ意味がありません

それに機体をP Tに移行するときに、その癖があると直すのに苦
劳しますしね」

「ほう、では「X M 3」の最大のウリとは？」

興味深々の顔で意見をきてくる

「近衛軍の方では教えたんですが、最大の特徴が三次元軌道ですね
そしてP Tに機体を移行すると三次元軌道＋人間以上に人間らし
い動きですね」

「三次元軌道は何となくわかるのだが、人間以上に人間らしい動き
とは？」

やはりP Tの特徴である”人間以上に人間らしい動き”が理解出来
ない様だ

「そうですね戦術機でもある程度は可能なのですが
例えば空手家のパンチを「X M 3」を搭載した戦術機でやろうと
すれば

腰から腕へ力をのせたパンチが放てるとします

しかし、P Tはそこから地面の接地面から足・腰・肩・腕・拳に
いたるまで再現出来るんです

しかも格闘技の流派があるならそれも完璧に覚えさせることが出
来るんです」

「なるほど、今までの戦術機の動作基準を持っていると
BETA戦闘を基本に考え

人間の動きで考えられなくなってしまうからか」

どうやら納得してくれたらしい

「勿論、人間ができない動作も出来るという前提が崩れた訳でもない
ので

二つの概念があると覚えていたほうがいいです」
「なるほど」

ニヤツ、笑う巖谷さん。だが今は別のところで問題がある

「本来なら時間を掛けて訓練したり

武装面の強化でカバーしたいんですけどね」

「やはり彼の国の影響かね？」

それもあるが今回は違う

「それも勿論あるのですがBETAの動きがどうも怪しいんですよ」

「ーッ、まさか冬樹君はBETAの動きを掴んでいるのかね!？」

さすがにBETAの動きを掴んでいるなんて話したら興奮して詰め
寄られた

「落ち着いてください

今直ぐ進行してくるわけではありませんからから」

「あ、いや、すまない

で実際のところはどうかね」

「偵察衛星や日本近海に放った太深度震度計に鉄原ハイヴや重慶八

イヴから日本

それも九州方面に動きがあることが解ったんですよ

早ければ一月以内、遅くとも二月以内には進行してくるでしょう」

「この事は殿下には？」

「悠陽には勿論

榊首相や帝国軍にも九州方面の民間人の避難を開始しています

しかし季節が悪い」

「どういう事かね？」

「九州方面に台風が上陸するんですよ

BETAには関係なくても此方の戦線は九州方面を捨てなくてはなりません

最悪帝都まで進行するでしょう」

「確かにそれは不味いな、だから「XM3」だけでも全軍に配布したいのか」

「その通りです

ブラックボックス化はしていますが「XM3」だけなら何処にバレても問題有りません

逆に武装関連で高周波長刀はまだ良いとしても

HESH弾や超電磁砲は彼の国の影響があるうちは使えませんか
らね

まあPTも同じですけどね」

「優秀な武器があっても今の日本の状況では使用できないか」

巖谷さんはそう言うため息はいて今の日本の状況を嘆いた

「しかし、巖谷さん

BETA進攻はもしかしたら彼の国から日本を取り戻すチャンス
かもしれないですよ」

「どうしてそう言い切れるのかね？」

日本が取り戻せると聞くと今度は目を見開いて俺の意見を聞いてきた

「 ” 第四計画 ” を潰したい ” 第五計画 ” の企み

というのもあるのですが彼の国と日本の戦術ドクトリンの違いや日本が自国の土地で核兵器の使用をせずに戦術機や通常兵器だけで殲滅戦を行う

それによって、彼の国の駐屯軍兵士が徒に被害が出ると判断した彼の国は一方的に条約を破棄するっていうのがBETA進攻の際に彼の国が行う行動だと判断したんですよ

だからこそ日本を取り戻せるチャンスかもしれないと言ったんです」

そこまで説明するとまた何か驚いたような呆れられたような顔をされてしまった

「は、そこまで ” 読む ” かね

いや、確かにBETA進攻で日本が取る作戦や彼の国が取る戦術ドクトリンを考えると余計にそう思えるな」

「でも、あくまでも予想です。他の方法で影響が無くせるのならこちらのほうが良いにきまっています

BETAせいであってしまふのは最悪の未来ですよ」

「まったくその通りだな

ああ、冬樹君は部隊の訓練もしなければならぬのに時間を取らせてしまったね」

「ああ大丈夫ですよ

狭霧さんや駒木さんは「X M 3」の教導で富士教導隊に行ってもらってますけど

訓練監督には彩峰さんが居ますし新人二人は唯衣さんが見てくれます

それにうちの部隊はPT専門の部隊ですからね
慣れるまではもう少しかかりますから」

「そうだったね

唯衣ちゃんも冬樹君の部隊に入れて喜んでいたからね

しかし、あの彩峰中將が少佐にまでなつて冬樹君の部隊の運営と戦闘母艦指揮隊長をやるとわね」

巖谷さんがしみじみそう思うのも無理は無いだろう

新部隊設立の時に救けられた恩を返したいだとか色々言われて母艦指揮として来てもらったのだ

その時に狭霧さん、駒木さんに新人衛士の塚原武道と九十九つくもいろは五六八もこの部隊に編隊してきた

唯衣さんはあの夜の交渉の時に巖谷さんに進められたのだ
それ以来巖谷さんとも仲良くなった

ちなみに部隊表はこんな感じである

- ・ 戦闘母艦指揮隊長、彩峰萩閣少佐
- ・ 隊長、飛鳥冬樹特務少佐
- ・ 副隊長、狭霧尚哉中尉
- ・ 副隊長、駒木咲代子中尉
- ・ 副隊長、篁唯衣中尉
- ・ 隊員、塚原武道少尉
- ・ 隊員、九十九五六八少尉

以上の変則小隊を組んでいる

「でも、そろそろ訓練に参加してきますね

今日は正式に決まった部隊名を全員に伝えないといけないし、
今日参加出来ないと、明日からは暫く香月博士のA-01部隊の

P T教導に行かないと行けないんですよ」

そう香月博士の所にもP Tを渡してあるので今現在教導出来る人材が俺しか居ないのだ

「そうか、冬樹君も色々大変だね」

「本当そう思いますよ」

俺としては自由を満喫したいんですけど

俺の方から背負い込んだ事ですからサボるわけにもいかないですし」

「はっはっは、それじゃあしょうが無いね」

ところで、唯衣ちゃんを嫁にしないか？

気立てはいいし料理も上手で肉ジャガなんか最高だよ」

うん、最後の最後でこれだ

巖谷さん由依さんの叔父に当たる人らしく話しの最初や最後に毎回こつこつ話を振ってくるのだ

「巖谷さん

毎回言ってますけどそういうのは本人が決めることですよ」

「大丈夫だよ、唯衣ちゃんは冬樹君の事気に入ってるし」

「はあ、訓練に遅れるから行きますね」

「あ、冬樹君、まあ・・・」

巖谷さんの話に付き合い切れなくなった俺は早々に部隊が訓練している場所までP Tに搭乗して移動した

冬樹SIDE OUT

12 新部隊結成 前編（後書き）

今回、名前だけですが新キャラを出しました

名前で分かる方も居るでしょうが、完璧にオリキャラ路線なので似てないよー、などの苦情は勘弁して下さいとお願いしておきます

それではまた次回もお楽しみください

12 新部隊結成 後編（前書き）

前回の続きになります

12 新部隊結成 後編

時間を少し巻き戻し、冬樹と巖谷が話をしている時に行われていた唯衣、武道、九十九の部隊訓練である

唯衣SIDE IN

二週間前のあの日から私は飛鳥特務少佐が隊長を務める部隊の副隊長になった

この部隊はP Tバーソナルトルーパーと呼ばれる機体を専門に扱う部隊であり
征夷大將軍 煌武院悠陽殿下直属の実働実験部隊でもある

今現在は、練習機を使用して完熟訓練を行なっている

練習機名アルブレードMark? (和名 瞬刃)

確かにP Tに慣れるための練習機として渡された機体だが、練習機等と言って良いシロモノでは断じて無い

主機出力、操作性、限界稼働時間、高速空戦戦闘能力、単独長距離航空能力

標準武装でさえ超電磁砲、光学兵器を装備

、
特筆すべきはキャンセル・先行入力・コンボといった新しい概念に加え

急加速や急停止の時に掛かるGの無さだ

この機体を戦術機の世代で当てはめれば確実に第五世代機や第六世

代機に当てはまるだろう

そんな練習機とは名ばかりの機体で平地での実機訓練を行なっている

今は、飛鳥隊長が考案されたPT戦闘機動訓練の一つ、三次元継続飛行機動訓練を行なっている

「貴様ら、動きを止めるな！！

常に低空飛行しながら動き続ける！！」

「了解」

この訓練で求められているのは、常に飛行しながらの高速三次元機動

戦闘機のような機動に体操選手の技を混ぜた様な動きに加え、急加速、急停止に緩急を加えた動きで常に低空飛行を続けながら行う

地表ギリギリに浮いたまま、クイックバックからのクイックターン、急上昇、倒立反転、再び地表まで急降下しながら右回り身伸びねりの要領で倒立、水平匍匐飛行からのバレルロール、急停止など、様々な機動を平均時速400?で行なっていた

通常の戦術機で此の様な動きをすれば機体の自壊だけでなく中に乗る衛士もGの影響で圧死、運がよければ気絶程度の動きだ

また、通常の対BETA戦では、空を飛ぶなんて自殺行為も甚だしいが、この機動が出来れば光線種のレーザー照射でさえ避けられるシミュレーションではあったが、飛鳥隊長が瞬刃を駆り、空中でレーザー照射を何度も避けながら空を飛び回る姿は感動を覚え、隊の誰しもが三次元継続飛行機動を覚えようとより必死になって励む起

因となった

飛鳥隊長曰く、テスラ・ドライブ搭載型PTなら障害物さえ無ければ対Gを殆ど気にせず無重力空間の用に縦横無尽、どんな体制でも動きつつけていられるらしい

「塚原、九十九、もうバテたのか？」

貴様らはその程度か？」

「へっ、おもしろい冗談やな唯衣姉さん
ウチはまだまだ余裕やで！」

「だ、大丈夫です。篁さん」

「なら、休むな！！」

次のポイントまで全速水平匍匐飛行

急停止後に高度400まで急上昇、その後クイックバックだ」

「了解」

PTと言う機体に、飛鳥隊長の示してくださった明確な目標のお陰で、今のところのPT完熟訓練はスムーズに進んでいる

それに塚原と九十九は私見だが、この訓練によくついてきていると思う

PTの性能が凄過ぎると言う事もあるのだろうが、戦術機に慣れていない新人の為、上空での戦闘や急加速・急停止の機動に躊躇いがない分覚えも良い

逆に戦術機の特長を知っているものは、この動きは出来ない

最初こそ私も含め古参の三人は、戦術機のイメージがあり、あまり

に違いすぎる機体と機動概念に躊躇っていた

だが慣れてしまえば後はもう機体が自分の身体のように、イメージ道理に動いてくれる

今も上空に飛び上がり、大空を自由に駆け回っている

不意にPTの凄さに頬を緩め、口角が釣り上がってしまう

戦術機開発にも携わった者としては嫉妬もあるが、この機体ならBETA殲滅が実現出来るという希望の方が優っていたからだ

・

・

・

「ヨシ！、三次元継続飛行機動訓練を終了する

10分の休憩の後、次はJIVEESを使用した近接武装限定格闘戦訓練だ

始めは塚原対九十九、次に塚原・九十九対私の順だ

その間の機体チェックを怠るな！」

「了解」

機動のみの訓練が終わり、次の訓練に進む

近接武装限定格闘戦だが、此处でもPTと戦術機の違いが出てくる

通常の戦術機では、長刀や近接戦闘用短刀での斬撃や肩部装甲による体当たり位しか実行されないが、PTではパンチ、キック、肘打ち、膝打ち、果ては関節技や投げ技に到るまで実現できる

これも今の戦術機には無い、装甲や関節部の強固さや、OSによる、より人間らしい自身の動きの再現が可能なお陰だ

「つゝかはるあゝ、今回こそギツタギタにしたるわ！」
「むー、俺も負けないからね！」

塚原と九十九の対PT格闘戦では、毎回此の様な衝突が有る

塚原は生身での剣術がとても強いく、PT操縦での近接格闘、特に長刀による剣術戦闘がとても良く反映されている

その為、近接武装限定格闘訓練だけなら今現在、九十九に無敗なのだ
九十九自体も生身とPT操縦において近接格闘、射撃能力が高く、
近・中・遠を満遍なくこなせるオールラウンダーと貴重な存在であり、塚原とのPT総合戦ならば勝率7割をキープしている

けれど、九十九本人は近接戦闘で塚原を倒したい

塚原本人もまた、近接戦闘、特に剣術だけは負けたく無い為か、近接武装限定格闘訓練になると毎回のごとく張り合っている状況が生まれる

「まったく、二人とも毎回良く飽きないものだ」

うつすらと笑を浮かべながら二人の意地の張り合いを見て考える

「今はまだ二人の経験の無さや連携の甘さで勝てるが、もう少ししたら二人同時は勝てなくなるだろうな」

未だにギャーギャー騒いでいる仲の好い二人を見て、独り言をこぼしていた

唯衣SIDE OUT

三人称SIDE IN

「相変わらず凄まじい機動だな」

指揮車両の中から外で行われているPTの訓練を見て、そうこぼしていた

まるで昔見た戦闘機のアクロバット飛行の様に、地表から空に向かって縦横無尽に動き回っている

対BETA戦、特に光線種のレーザー照射の怖さを知る者達にとってこの光景はさぞ愚かな行為に写るだろう

だが、PTの性能や空を飛んでいてもレーザー照射を躲せる事を知る私にとっては頼もしい姿にしか写らない

しかし、跳躍ユニットも無しにあそこまで動かれると、あの機体の周りにだけ重力が無いように見えてしまう

《彩峰少佐

次は近接格闘訓練を行わせていただきます

各機体へのJIVES設定をお願いします》

三次元継続飛行機動訓練が終わり、唯衣君から通信が入ってきた
どうやら次の訓練に移行するらしい

「了解した

それよりも唯衣君も公の場以外は階級は付けなくてもいいんだよ？
冬樹君にも言われただろう」

《し、しかし、軍機もありますし

彩峰少佐程のお方に階級も無しに読んでいいと言われまして》

ふふ、すごい狼狽え用だな

まだ慣れていなかったらしい

「ははは、今の上司は冬樹君で私は部下だよ

上司の命令は聞いておかないと

最も冬樹君の場合はお願いになるかな」

《ははは、唯衣姉さんにそりや無理な相談やで、彩峰のオツチャン》
《つ、九十九さん、彩峰さんにオツチャンはダメだよ》

おや、武道君と五六八君この通信を聞いていたのか

《貴様ら！！

上官同士の話に割り込むなどと、しかもオツチャンだと！！》

「唯衣君、いいんだよ

ちゃんと公の場で切り替えてくれれば」

《しかしですね！！》

唯衣くんも直也と同じで少し固いな

ピーー、ピーー

此方に近づく味方機の反応があり、アラームが鳴り響く

どうやら冬樹君が搭乗した瞬間刃が来たらしい
タイミング的にも丁度良かった

「唯衣君、冬樹君が来たみたいだよ」

それだけ伝えると唯衣君達の方でも確認出来たらしく、目視でも機体を確認できた

《みんな、遅くなった

彩峰さんも唯衣さんも訓練を任せっきりにしてすいません》

冬樹君の瞬刃が休憩中の唯衣君達の機体の前に降り立つと全員に通信を入れてきた

「ははは、冬樹君は人一倍忙しい身だ、気にすることはないよ」

《その通りです飛鳥隊長

僅かな時間でも飛鳥隊長の訓練は為になりますから》

《ありがとうございます

でも唯衣さん。そんな”飛鳥隊長”なんてかった苦しい呼び方じやなくていいですよ？》

《しかしですね！！》

《隊長、唯衣姉さんにそりや無理やって

それよりも隊長、塚原のやつギッタギタにしたいねん

三次元機動での近接格闘おしえたってや！》

《ふゆええゝん、あすかさゝん、たすけてくださゝい》

《貴様ら！！》

《ははは、みんな仲がいいねゝ》

《飛鳥隊長、笑って済まさないでください！！》

由依さんはちよつと固いけど、部隊としてはいい感じになってきたかな

さて訓練前にあの報告だけはしとかないと

《じゃあ訓練する前に全員に報告があるから聞いてくれ》

それだけ言つと全員が静かになり、普段の態度から軍人のそれになる

《きたるべき日まで我が隊が秘密部隊なのは変わらないが

今まで暫定だった所属と部隊名が正式に決まった

所属、征夷大將軍直屬侍所

部隊名、侍所第一小隊

そして部隊でのコールサインがフロンティア

彩峰さんがフロンティア00

俺が01、狭霧さんが02、駒木さんが03、唯衣さんが04、

五六八が05、武道が06だ》

今まで決まっていなかった正式な所属と部隊名を伝え、全員の顔を
見渡す

特に日本人にとって征夷大將軍直屬というのは嬉しいことなのだろう
全員、誇らしい顔に成っている

《飛鳥さん、質問してもいいですか》

通信者モニターに映っていた武道が右手を上げた質問してきた
まあ、何なのかは予想がつくが

《よし、武道質問どうぞ！》

《あの、”侍所”って、なんですか？》

やっぱり侍所ってところに気がついた

《そうですね、単純に直属部隊というわけではないのですか？》

《いいところに気がついたね！

侍所っていうのは斯衛軍、帝国陸・海軍とも違う、軍よりも小さい新しい軍なんだよ》

詳しい詳細を知っていた彩峰さん意外、みんな目を見開いて驚いている

《ちょ、ちょい待ちや！

そしたら何か、こちらは軍人やけども近衛軍や帝国軍に所属したらん侍所所属の新しい軍の軍人って事か？》

《五六八正解！

侍所は征夷大將軍直属だけでも私兵じゃない

それに、軍の規模も最大でも一個中隊だから軍とは名乗れないから侍所

それに近衛軍みたいに將軍家を守る為でも、帝国軍みたいに日本国民を中心に守る部隊ではなく世界のBETA戦線で人々を守る部隊なんだよ》

《え、それじゃあ国連軍みたいな立場になるんですか？》

《ちよつと違うな武道

俺達はいくまで征夷大將軍の直属だ

国外派遣が中心だが相手国や国連軍に手を貸して欲しいと言わない限り動かないし、ほぼ私兵並の規模しかないから拒否しても問題ない》

やっぱ、これだけじゃあ理解できてないのか武道と五六八と唯衣さんは頭に？を浮かべている

《そしたらやっぱ近衛軍属の一部署でエエんちゃうの？

わざわざ侍所なんていうのつくらんでもええんちゃうん？》

《ちょっとまってください、それならどうしても軍にしなければ不味い理由があるから侍所を立ち上げたと考えれば宜しいんでしょうか？》

どうやら気付いてきたみたいだな

《その通りだよ唯衣さん

俺たち侍所は最大で一個中隊しか隊を組めないけど、その実力が日本国内の全軍、いや彼の国の全軍に匹敵する世界最強、BETA戦における物量に対抗する究極の質の部隊になるから侍所が必要なんだよ》

ここまで説明すると一瞬は呆けていたが”世界最強”や”究極の質の部隊”とかに反応してきた

《おもしろいやんけ隊長！、BETAに勝てて、アメリカの全軍に喧嘩売って勝てる世界最強部隊やってやろっやないか！！》

《そんな強い部隊になるんだー》

《BETAの物量に対抗する最高の質の部隊、なるほどそれなら納得出来る》

三者三様で思い思いの言葉を発していく

どうやら皆納得してきたようだ

《それじゃあ今から我々”侍所”の訓練を開始するよ》

《《了解》》

俺が侍所の訓練と言った事に気合の入った反応する各々

《彩峰さん、官制指揮をお願いします》

「フロンティア00、了解

侍所、最初の仕事だ、まかせたまえ」

《それじゃあ、武道対五六八、俺対唯衣さんの近接武装限定格闘戦
毎回メンバー変えながらやっていつて最後に全員対俺でやるから
ね》

《最強めざして、いつちよやたろやないか！》

《うん、俺も頑張ります》

《ふふ、今日こそは勝たせて頂きますよ、飛鳥隊長》

この日、俺達の部隊は新たな所属と部隊名で動き出した

侍所としての新たな一歩

今はまだ秘密部隊だが、着々と準備は進んでいる

世界が彼等”侍所”を知るまであと少し

三人称SIDE OUT

12 新部隊結成 後編（後書き）

はい、今回いろいろ自重しないでやっちゃいましたが後悔はありません

部隊のキャラクターについて知っている人もいますが、作者の想像力ではこれが限界です

別枠でキャラ説やりますが、作者の文才や想像力不足で、ほぼ名前だけのオリキャラ化するかも・・・

まあ、こんな作品で良ければ次回もお楽しみに

侍所と部隊とプロフィール（前書き）

オリジナル要素とネタバレ要素があるので注意してください

侍所と部隊とプロフィール

征夷大將軍直属侍所

飛鳥冬樹と日本帝国との契約によって作られた斯衛軍、帝国軍に次ぐ、第三の軍隊

斯衛軍は基本的には、將軍家に連なるものを守るための軍

帝国軍は日本国民を守るための軍

だが、侍所は世界各国のBETA戦線に派遣するための対外派遣専門の軍隊である

征夷大將軍 煌武院悠陽の勅命でしか行動しない為、日本国内では独自行動権を、対外派遣では征夷大將軍が各国の軍隊と交わした契約以外は独自行動での活動が基本となる

対外派遣の契約は独自行動権の行使を基本とし、征夷大將軍が契約を交わした国が軍隊の最高指導責任者の直接命令以外は拒否出来るまた、”BETAの物量に対抗する究極の質”を追求された軍隊の為、最大保有戦力が戦艦2積、PT16機の中隊しか保有できない様にしている（最大戦力を投入すればオルタ世界の軍隊全軍を壊滅できる）

侍所部隊表、プロフィール

・彩峰萩閣

所属部隊・役職：侍所第一小队戦闘母艦指揮隊長

階級：少佐

コールサイン：フロンティア00

元、帝国陸軍准将

光州作戦時に冬樹に救けられた事に恩を感じており、今回の新軍隊設立に協力してくれた人物の一人
自身も帝国陸軍から侍所へ出向、階級も少佐まで落ちたが本人は気にしていない

戦闘母艦指揮隊長以外にも、冬樹に代わり侍所全部隊の運営や帝国軍、斯衛軍への繋ぎなど、表の仕事を一手に引き受けている

冬樹の基本方針である、公の場以外は全員階級無しで呼び合え（冬樹本人はなるべくお願いと言っている）を

気についており、彩峰さんやオツチャン等と呼ばれている

帝国軍一の人望の持ち主で、中將まで務めた優秀な人物

昔は狭霧と娘である慧を結婚させようと画策していたが、狭霧と駒木が恋仲に発展しようとしているのを見て

慧を冬樹に嫁がせようと色々画策している（表には出さないが、タマパパと同じくらいの親バカ）

？

・狭霧尚哉

所属部隊・役職：侍所第一小隊副隊長

階級：中尉

コールサイン：フロンティア02

元、帝国陸軍中尉

彩峰少佐が侍所に出向するときに付いて来た四人の内の一人

彩峰少佐は頭初、狭霧を連れてくるつもりは無かったのだが、光州作戦に参加できなかった悔しさや、彩峰少佐が光州作戦で出した被害で危うく処刑されそうになった為、狭霧自身がもう後悔したくないと頼み込んで侍所に出向することになった

また、冬樹自身にも彩峰少佐を助けてもらった恩を感じており、忠義を尽くそうとしている

だが、冬樹はそんな忠義を尽くそうとする態度ではなく、もっと友達のような付き合いが良いなと思っている

侍所に一緒に出向になった駒木と最近は好い仲になっている

？

・駒木咲代子

所属部隊・役職：侍所第一小隊副隊長

階級：中尉

コールサイン：フロンティア03

元、帝国陸軍中尉

彩峰少佐が侍所に出向するときについて来た四人の内の一人

元々、狭霧の補佐をしており、狭霧が彩峰少佐に付いて行く時に一緒に連れていって欲しいと頼み込んだ結果

侍所に出向になる

侍所の活動でも狭霧と組んで行動を共にしている

最近、狭霧とも好い仲になっている

？

篁唯衣

所属部隊・役職：侍所第一小隊副隊長

階級：中尉

コールサイン：フロンティア04

元、帝国斯衛軍

開発主任装備実験部隊「白き牙中隊（White Fangs）」

中隊長をしていたが、巖谷中佐の薦めもあり、侍所に出向となった唯衣自身も冬樹の持つPTや技術に興味があり、まさに渡りに船だ

った

侍所での活動は、基本冬樹の補佐だが、今はまだ冬樹を手伝える事が無いので彩峰少佐の補佐や新人教育等が今の主な活動になっている
狭霧と同じく、少しお堅い性格で冬樹本人は友達のように付き合っている
欲しいと思っている

最近では巖谷中佐に冬樹との仲をからかわれており、冬樹の事が気になる存在になっている

また、巖谷中佐は本気で由依を冬樹に嫁がせ様としている（巖谷中佐は既に孫の名前を考えまくっている）

？

つぐもいろは
九十九五六八

所属部隊・役職：侍所第一小隊隊員

階級：少尉

コールサイン：フロンティア05

元、帝国陸軍少尉

彩峰少佐が侍所に出向するときに付いて来た四人の内の一人

まだBETA戦を経験したことがなく、戦術機操縦が未熟である程度才能の有る新人を欲した冬樹の為に彩峰少佐が自身の部隊から選別した新人

帝国軍に所属していたが、白を賜る武家の一つ、九十九家の当主でもある

幼い頃に父親はBETAに、母親は病死しており、帝国陸軍に入るまでは祖父母と一緒に暮らしていた

近衛軍に入隊しなかったのは、父親が帝国陸軍の軍人だった為、同じ道に進もうと考えた結果である

武道とは陸軍衛士訓練校時代からの腐れ縁で、未だに生身、PT共に近接格闘（剣術）だけ勝てないので毎回突っかかっている。それ

以外ならオールマイティーに何でもこなせる司令官タイプの非常に優秀な人材

冬樹の公の場では全員階級なしに呼びあえのお願いに対しても、そんなにに対応してくれていし、冬樹のことを兄のように慕っている（容姿や性格はイレブンソウルの人です。でも、高所恐怖症ではない。武道とは恋仲にする予定）

？

・塚原武道

所属部隊・役職：侍所第一小隊隊員

階級：少尉

コールサイン：フロンティア06

元、帝国陸軍少尉

彩峰少佐が侍所に出向するときについて来た四人の内の一人

まだBETA戦を経験したことがなく、戦術機操縦が未熟である程度才能の有る新人を欲った冬樹の為に彩峰少佐が自身の部隊から選別した新人

普段は、ポヤポヤしており、偶に不思議なことを質問してきたりするが、本質を見抜く勘の良さがある

両親共にBETA戦で死亡しており、帝国軍に入るまでは紅蓮大将に鍛えられていた

何故、紅蓮大将に鍛えられていたかというと、父親が紅蓮大将の直弟子であり、父親が怪我のため紅蓮大将を超える剣術家になれなくなってしまう、息子である武道を鍛え、紅蓮大将を超える剣術家になろうとしていたのが理由で陸軍に入るまで紅蓮大将の道場で住み込みで鍛えられていた

だが、武道本人は、剣術よりも、叶うなら宇宙に関する仕事をしたいと思っている。その為、少しでも宇宙に関われるのが、帝国陸軍

衛士になるしか無かったで帝国陸軍に入隊した

その為、冬樹が武道に宇宙を見せてやる発言で物凄く懐かれているし、隊の中では一番の弟役にもなっている

剣術に関するのなら、生身でもPT操縦でも隊随一の腕前であり、そのせいで近接格闘訓練（剣術）のさい、五六八に毎回敵意むき出しで突っかかっている。今のところ五六八との近接格闘訓練（剣術）の対戦では、生身、PT共に無敗である

また、非常に目が良い為、長距離射撃特性も高い

（容姿や性格はイレブンソウルのあの人です。合成いちごみるくが好物で何時も飲んでいる。五六八とは恋仲にする予定）

13 香月博士と霞ちゃん（前書き）

遂に霞ちゃんが登場です

13 香月博士と霞ちゃん

横浜・帝国陸軍白陵基地

現在この基地では日本が主催国として、国連で認証された計画が進められている

計画名「オルタネイティヴ？」

対BETA諜報員育成計画であり、量子電腦を搭載した00ユニットと呼ばれる物を作成し、核兵器やG弾を使用しないで、通常兵器のみでのハイヴ攻略を目的とした計画である

そして、計画総指揮者である彼女、香月夕呼と彼、飛鳥冬樹はこの場所です二度目の邂逅を果たす

冬樹SIDE IN

「国連軍所属、香月夕呼副司令付きの秘書を担当させていただいています

イリーナ・ピアティフ中尉です

香月副司令の命令により基地内での少佐の案内役を担当させていただきます」

現在、香月博士の特務部隊A-01にPTの教導をする為に横浜・帝国陸軍白陵基地に来ている

で、今何をしているかという、基地内の応接室で香月博士の執務

室への案内人を待っていたら、中尉が来たので、挨拶を交わしているところだ

「帝国斯衛軍征夷大將軍直属教導部隊隊長 飛鳥冬樹特務少佐です
よろしく頼む」

ちなみに、侍所の名称はまだ秘密なので、普段は斯衛軍征夷大將軍
直属教導隊の名を名乗っている

「こちらこそよろしくお願いします、飛鳥少佐

では、副司令の執務室まで案内をさせていただきます」

「よろしくたのむよピアティフ中尉」

「いえ、では此方になります」

挨拶もそこそこに、ピアティフ中尉に連れられて応接室を後にする

・
・
・

ピアティフ中尉に案内されながら機密エリア直通のエレベーターに
乗り、地下にある香月博士の執務室の扉の前までやって来た

「副司令、飛鳥特務少佐をお連れしました」

扉の前に設置された通信端末を操作し来客を伝える

『あゝちよつと待つて・・・いいわよ入ってきなさい』

扉が開くと回転椅子に座り、デスクの上ののっているパソコンを操
作している香月博士と14〜15歳ほどのうさ耳にも似た黒いカチ
ューシャに黒の国連服を着た銀髪の少女が側に立っていた

なぜ少女が居るのは解らないが、少女が此方を見た瞬間俺は何かを感じ取った

少女の方も俺を見た瞬間、少し目を見開いて驚いた顔をしていた

俺はこういう感覚に覚えがある

たぶん、少女は何かしらの能力者なのだろう

「ピアティフ、もういいわよ」

「では、失礼します」

香月博士がそれだけ言うと、ピアティフ中尉は部屋を後にする

「久しぶりね、飛鳥

だいぶ派手に動いているみたいじゃない」

今までパソコンに向けていた顔を此方に向け妖艶な笑みを浮かべて挨拶をしてくる

「どうも、香月博士

別に博士がしていることに比べたら微々たるものですよ」

「まあ、あんたにとっては「X M 3」なんて大したものじゃないからね」

「まあまあ、ところでそちらに居る少女は誰ですか？」

挨拶もそこそこに少女の事について聞いてみる

「な〜に、あんたまさか!？」

「こんな小さな子が趣味なわけ？」

「な、なに言ってるんですか!？」

こんな場所にこんな小さい子がいるから気になっただけですよ」

香月博士にからかわれ、少し焦りながら答える

「まあいいわ

この子は私の研究に必要なだからここに居るのよ
社、挨拶なさい」

「・・・・・・・・社・・・・霞です」

ゆつくりと、儚げな声で、ペコツと擬音が聞こえてきそうな感じに
頭を下げて挨拶をしてくれた

「俺の名前は飛鳥冬樹

好きに呼んでいいからな。よろしく霞ちゃん」

霞ちゃんの目の高さまで腰を落とし挨拶をする

「・・・・・・・・あなたは、なぜ、みえないんですか？」

冬樹SIDE OUT

霞SIDE IN

今日は、博士の知り合いが訊ねてくるので、博士の執務室に来るよ
うに言われた

最近の博士は機嫌が良い

二週間前に何処かに出掛けられてからだ

私は、博士をリーディング出来ないから、どうして機嫌が良いのかわからない

何時もは、たぶん研究の成果が出ない為、表情には出ないが焦っていた

でも、最近は、何時もどこか楽しそうにしている

「社、今日訊ねて来る”飛鳥冬樹”って奴に社の能力こと話すけど飛鳥に能力の事を話すまでは、いつも通りリーディングを続けなさい」

博士の執務室に来て直ぐに、博士からそう言われた

私は、首を小さく縦に下げて頷いた

・・・

・

しばらくして、ピアティフ中尉と一緒に若い男の人が訊ねてきた

私は、何時ものようにリーディングを試みる

「・・・・・・・・」

でも、なにも見えなかった

違う、見えないでは無く、何かに防がれて何もわからなかった

博士に対して思考を読ませないようにする処置ではなく、男の人の

意志で防がれた

「俺の名前は飛鳥冬樹

好きに呼んでいいからな。よろしく霞ちゃん」

男の人は、少し屈んで視線を私に合わせ、柔らかな笑みを浮かべ挨拶をしてきた

でも、私には理由がわからなかった

彼を覗こうとしたのに、彼はその行為がわかっているはずなのに

「……あなたは、なぜ、みえないんですか？」

私は、どうしても聞きたかった

なぜ、あなたを覗こうとした私にそんな笑顔を向けれるのかを

霞SIDE OUT

冬樹SIDE IN

「どういう事、社？」

霞ちゃんの質問に香月博士の顔が陰しくなる

「霞ちゃんが俺を見たときに何かしようとしたのを防いだ事を言っているのかな？」

それと、あなたじゃなくて名前で読んでくれ」

「そんな事はどうだっていいわよ！！」

飛鳥、あんた社と同じESP能力者なの

答えなさい!!」

「そんなに怒鳴らなくても答えますから落ち着いて、ね!」

「いいから答えなさい」

「霞ちゃん的能力が何かは知らないですけど、俺はサイコドライバーっていう念動力者なんですよ

で、霞ちゃんがかしているのが分ったから防いだけですよ」

能力のことを答えても興奮して色々聞いてくるので取り敢えず落ち着かせていたら

「……………すみませんでした」

霞ちゃんが俺の前までやって来て、俯いたまま謝ってきた

「どうして謝るの?」

「……………あなたの中をかってにのぞいたから」

ますますシュンとなって答える霞ちゃん

「俺は別に怒ってないし

嫌な思いもしていないから謝る必要なんかないよ」

右手で霞ちゃんの頭を優しく撫でながらそう伝えたと凄く驚いた顔をされた

「……………どうしてですか?、こわくないんですか?」

霞ちゃんは、自分の能力が好きではないと思い、俺の考えを言った

「能力なんてその人の個性だから別になんとも思わない

どんな力でも使う人の心次第だよ

それに霞ちゃんみたいな可愛い子を怖いなんて思わないよ」

「……………ありがとうございます」

お礼を言ってきた霞ちゃんの頭を暫く撫で続けた

それから撫でるのを止めると悲しい顔をされたのには少し罪悪感が湧いたものだ

だが、その光景を香月博士はニヤニヤと意味深に眺め続けていた
弱みを握られたかもしれない

それからは霞ちゃん的能力のリーディングとプロジェクションを教
えてもらい

俺の能力について詳しく説明したり、今後の対応やA - 01の教導
について話し合っていた

それに前回会ったときに話していなかった量子コンピューターの基
礎理論の数式の話をしたら「飛鳥、あんたサイコーよ!!」と言
って抱きつかれてキスの嵐を食らった

その時、霞ちゃんは頬を赤く染めて此方を見続けていた

結局今日は、香月博士と今後の打ち合わせや量子学についての学者
的な話にのめり込んでしまいA - 01との顔合わせや教導が明日か
らとなってしまった

まあ、香月博士は満足していたのでよしとしよう

冬樹SIDE OUT

夕呼SIDE IN

「ふふ、社ったら随分、飛鳥の奴に懐いていたわね」

飛鳥と社が居なくなつた執務室で一人そんな事を言っていた

最初、社の能力を使って、まあ、社の事も説明するつもりだったけど、色々してやろうと考えていた

飛鳥の後を単に追い縋っているだけなんて、天才である私には我慢が出来なかつたし

だけど、あいつは自身、サイコドライバーなんて言う能力者で、社のリーディングを防いだと聞かされたとき飛鳥に対しての興味がまた跳ね上がった

そして、飛鳥と再び話して解ったことがある

あいつは、飛鳥冬樹という人間はあらゆる意味で与えられた人間でそして、私や社の持つ孤独と同じものを持ち、理解できるヤツだということ

全ての高みにいる飛鳥はそれこそ仲良くなれる人間はいても、同じ目線に立てる人間がない

まあ、それも今日までの話だ

「私と、同じ目線で話せる人間がいるなんて・・・ね」

頭脳では私、能力では社

今日、はじめて知つた、分かつた

同じ目線で話せる相手がいることの何と嬉しいことが

「社が懐くのも納得だわ」

あいつ自身の甘さもあるが、同じような孤独を理解できる人間なんて、そうは居ないし出会うことも滅多に居ないだろう

今までBETAの殲滅やら人間同士の策謀やら、つまんない事で摩耗していた日々に、新しい風が吹いてきた

「でも、私達は出会った

これから楽しくなりそうね」

まあ、暫くは飛鳥をからかって遊べそうねなんて考えながら
うつすらと笑を浮かべ

今後の問題を解決する為に再び思考の海へと潜っていく

夕呼SIDE OUT

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・ ・

・

おまけ 三

「ところで霞ちゃん、いつ着替えたの？」

それになんで俺が寝るベッドに潜り込んでいるの？」

「・・・いや、ですか？」

か、霞ちゃんが凄く悲しい顔してる。な、何故こんなことになった？

えーと、香月博士の執務室で三人で食事をした後、明日のために休むように言われて、滞在期間中の部屋に霞ちゃんが案内してくれて

「そ、そんなことないよ、ただ霞ちゃんも眠たいなら自分の部屋に戻らないと」

そう、俺は霞ちゃんに妙に懷かれてしまい、案内するときでも腕にくつつきながら案内されていたのだ

小動物みたいで可愛いなあとは思っていたが

けど、部屋の中まで入ってきて一緒に寝るのはダメだって（主に俺が！！）

「いや、ね、俺も男だし、それにほら、香月博士も心配するでしょう？」

「……大丈夫、です……博士が良いと、いつてくれました」

あんにやりよー！

もう詰んでんじゃない！！、断るの絶対無理！！

「……やっぱり、いや、ですか」

「そんなことないからね！？

だから、そんな悲しい顔しないで！？

さ、一緒に寝ようね」

「……はい、一緒に、寝ましょう」

結局俺は霞ちゃんのお願いに負けて一緒に寝る事になった
余談だが滞在期間中は彼女とずっと一緒に過ごす事となってしまう
た（香月博士の陰謀だー！！）

13 香月博士と霞ちゃん（後書き）

最近、ちょっと行き詰まってきましたが、何とか頑張って完結まで続けますので楽しみにしている方々はご安心ください

14 特務部隊A - 01 教導大作戦 前編（前書き）

A - 01メンバーとまりもちゃんが登場です
でも水月や遥は登場しません

14 特務部隊A - 01 教導大作戦 前編

冬樹SIDE IN

ユサユサ、ユサユサ

うゝん、誰だ俺の睡眠を妨げるのは

ユサユサ、ユサユサ

うゝん、しつこいなゝ

いいやどうせアシストロイドだろ

グイッ

うん、あんまりしつこいから俺のところに引き込んだ

モフモフ、モフモフ

あゝなんかやわらかくて、いい匂いがして、さらさら・・・？

こんな抱き心地のいいのあつたけ？

「・・・・・・・・・・によわゝゝ!!」

な、なに、なにがどうなってんのゝ

「・・・・・・・・・・あたたかいです／＼／」

「う、ごめんね！霞ちゃん」

目を開けると霞ちゃんを抱きしめモフモフしていた

取り敢えず抱きしめていた霞ちゃんを開放し、ベット下ろす

うん、どうしてこうなった

えーと、昨日は基地に来て香月博士と会って客室のベッドで霞ちゃんと一緒に寝・・・

そっだよ！？、昨日は霞ちゃんと一緒に寝たから、たぶん俺を起してくれたんだよ

霞ちゃん服着替えてるし！

「えーと、おはよう霞ちゃん？」

「・・・はい、おはようございます。冬樹さん／＼／」

表情はあんまり変わってないけど、若干頬を赤く染めてる霞ちゃん

「あの、着替えたいから外で待っててくれる？」

「・・・わかりました」

それだけ言つと素直に外に出て待ってつてくれた

うう、ごめんね霞ちゃん

その後は自己嫌悪に落ち込みながらも二人でPXに行つて食事をし、香月博士の執務室まで行つた

その際やっぱり霞ちゃんは俺の腕にしがみついて行動していた

冬樹SIDE OUT

三人称SIDE IN

「伊隅、昨日はわるかったわね」

私が香月博士の執務室入って、開口一番に言われたのが謝罪だった

「はあ？・・・は、いえ、問題ありませんでしたので！」

まさか博士から謝罪があるなど夢にも思はなかった

あまりにありえない事に、一瞬、完全に口を開いて呆けてしまい反応が遅れてしまった

「なによ、この私が謝罪するのがそんなにありえないと思ったわけ
」

「いえ！、そんなことは！」

素直にありえないと思っていたとは言えないな

「まあいいわ

それより伊隅、昨日紹介出来なかったPTの開発者にして教導してくれる奴がもうすぐ此処に来るから気合いれときなさい」

「ほ、本当ですか！？」

あの機体の開発者が来ているのですか！？」

PTの開発者が来ていると聞いた瞬間、胸が大きくはねた

香月博士がああの機体をどの様な経緯で手に入れたのかは分からないが、あの機体は今までの戦術機とは比べ物にならない性能だった

現にシュミレーションでのヴォーグルデータ攻略が、大隊規模の編成で最高が中階層突破だったのに対して、PTに乗り換えてからは小隊で全員が無事で反応炉までの攻略が可能になったのだ

今、私を見ている香月博士がニヤニヤしていようとこの喜びはかくせるものじゃない

「あら、ずいぶん嬉しそうじゃない

そんなに早く会いたいわけ」

「当たり前じゃないですか!!」

あの、奇跡とも呼べる機体の開発者に会えるなんて、会いたいに決まっています!!」

PTの凄さを熱く語る伊隅

まあ、伊隅の気持ちもわからなくはないわね

実際、私も00ユニットやら、物資や情報で飛鳥に助けてもらっているしね

伊隅と二人で話し込んでいたら扉が開き、噂の人物と社が入ってきた

「おはようございます、香月博士」

「ええ、おはよう飛鳥

へえ、昨日は社とよろしくやってたみたいね」

「何言ってるんすか香月博士!!」

霞ちゃんはまだ少女なんですよ」

まったく、昨日といい、今日といい、この人は俺を犯罪者にしたいのか

「えゝ、いいじゃない別に、セイバーっていう前例もあるんだし」
「あのですねゝ、それこそあり得ませんよ！」

基本は俺が作りましたけどあの姿は完全にセイバーの趣味ですから！！」

マジで、俺を弄ることだけならセイバーといい勝負だよ、この人

「……セイバーって、誰、ですか？」

「ああ、セイバーはね、俺の艦のAゝじゃ無かった、家族、妹だね」

取り敢えず霞ちゃんを撫でながら説明していく

「……家族ですか？」

「そう、家族

今度紹介するから友達になってくれ」

嬉しいのか頭に着いているうさ耳カチューシャが上下に激しくゆれている

「……友達、なりたいです」

「ああ、今度連れてくるからね」

それだけ言つとまた嬉しそうに頬を染める
なにこの庇護欲そそる生き物

「よかったじゃない、社」

「……はい、うれしいです／＼」

「まあ、飛鳥弄るのもこのへんにして

伊隅、彼がPTの開発者にして、しばらくの間あんた達A-01
を教導する飛鳥冬樹特務少佐よ」

いつの間にか此方の方を微笑ましく見ていた女性が挨拶をしてくる

「は！、自分は国連軍香月夕呼副司令直属部隊A - 01部隊「伊隅
ヴァルキリーズ」隊長の伊隅みちる大尉であります

あの様な素晴らしい機体を開発していただき感謝します」

のっけから感謝の言葉は照れるな。では此方も正式に挨拶しなくては

「日本帝国征夷大將軍直属侍所第一小隊隊長飛鳥冬樹特務少佐です
PTをお褒めいただき恐悦至極

本日よりA - 01の教導を担当しますのでよろしくお願いします
あと俺のことは飛鳥でも冬樹でも呼び捨てで構いません
大尉のことも伊澄さんって呼ばせていただきますから」

最後の呼び捨てで良いの言い回しに驚いたのかかなりあたふたして
いる

「いけません少佐！！
規律に反します！！

しかも貴方は斯衛の赤ではありませんか！！」

「ええー、いいじゃないツスカ別に」

香月博士だつてお硬いの抜きにしてるし

それに俺は斯衛じゃなくて侍所ですから赤服でも関係ないんです
よ

「しかしですね！！

それに斯衛ではなく侍所とはいったい？」

やっぱり侍所で困惑している、しかし

「伊隅、”Need to Know”よ」

”Need to Know”、香月博士が右人差し指を唇につけてそれだけ言うのと伊隅大尉は押し黙った

「失礼しました、しかし呼び方は善処させてください、飛鳥少佐」
「む、まあいつでも呼び捨てでいいですからね」

あまり無理強いはさせたくないのでしょうがないか

「じゃあ伊隅、さつさと飛鳥をA-01の所まで連れていきなさい
私と社もすぐに行くから」

「は！、了解しました博士
では、此方についてきてください」

執務室を後にし、A-01部隊のいる部屋に向かった

・
・

・
　　（ブリーフィングルーム）

「伊隅大尉、何やってんだろな」

「孝之、あんまりダレていると伊隅大尉が来たときに肅清されるぞ」

「平の言うとおりよ」

もうすぐ伊隅も来るんだからシャンとしていなさい」

椅子に座り、机に頭を垂れて頂垂れている鳴海少尉を平少尉と相原大尉が諫める

「う！、すみません」

相原大尉、慎二」

姿勢を正し、二人に謝罪する鳴海少尉

「まあ、孝之がPTに早く乗りたくてダレる気持ちは解らんでもないがな」

「ふふ、でも我慢することも衛士には必要よ」

「わ、解ってますって！」

慎二も余計なこと言っなよ！」

「なら、それを俺に言わせない様な行動をしろ」

二人に弄られて、ばつの悪い鳴海少尉をよそに、二人はククツと笑い続ける

丁度そんな時に部屋の扉が開き、伊隅大尉と斯衛の赤を着た若い男性が一緒に入ってきた

「敬礼！」

相原大尉の言葉に鳴海少尉と平少尉が立ち上がり、姿勢を正し敬礼する

伊隅が敬礼だけを止めさせ、隊員達の正面に立って話し始める

「紹介しよう、飛鳥冬樹特務少佐だ

今日から数日間、我々の乗るPTの戦技教導官を務めていただくこととなった

また、飛鳥少佐は衛士であると同時にPT開発者でもある」

伊隅大尉の言葉に三人は一斉に目を見開き冬樹を見る

教導官というよりもPT開発者という方に驚いているようだ

そんな三人をよそに、伊隅大尉の横に居た冬樹が自己紹介を始める

「日本帝国征夷大將軍侍所第一小隊隊長 飛鳥冬樹特務少佐です
よろしく頼む

それに、あんまり固っ苦しいの苦手だから飛鳥でも冬樹でも
好きに呼んでいいから」

そんな冬樹の言葉に再び三人は絶句し、伊隅大尉は苦虫を噛み潰したように困った顔になる

「貴様ら、いつまで呆けているつもりだ！
相原、鳴海、平の順に自己紹介しろ」

「は！、失礼しました
A - 01部隊「伊隅ヴァルキリーズ」副隊長 相原美沙大尉です
部隊でのポジションは打撃支援を担当しています
よろしく願います、冬樹さん」

「こちらこそ、よろしく相原さん」

「いえ、私も美沙でかまいませんよ」

「それじゃあ、美沙さんと」

「じゃあ、次は俺ですね

A - 01部隊 鳴海孝之少尉です
ポジションは突撃前衛

ストーム・バンガード
よろしく願います」

「よろしく、孝之さん」

「孝之でいいですよ

俺も冬樹って呼び捨てでいいですか？」

「勿論、構わないよ孝之」

「最後は俺ですね

A - 01部隊 平慎二少尉です

ストライク・バンガード

強襲前衛を担当しています

俺の事も慎二で構いません

よろしく願います冬樹さん

「こちらこそよろしく、慎二」

伊隅さんには悪いと思いつつ、順応性が高くて助かったと思う冬樹
そんな全員の自己紹介が終わると冬樹は疑問に思った事を口にする

「伊澄さん、ちょっと質問していいですか？」

「は！、何でしょうか？」

固いな、と思いつつも疑問を口にする

「部隊員はこれだけしか居ないんですか？」

「それは私が説明するわ」

疑問を質問しているときに、部屋の扉が開き、香月博士と霞ちゃん、
それに国連服を着た若い女性が入って来た
勿論、霞は冬樹の後の回り、服の袖を掴んで、定位置と言わんばかりに待機した

「副司令」「神宮寺教官」

「敬礼なんて、無駄なことしないでいいって何時も言ってるでしょ」

敬礼をしようとしたA - 01部隊に、嫌そうな顔をして敬礼を止め
させる香月博士

それに教官と呼ばれた女性は”私はもうあなたがたの教官ではありませんよ”と言い、苦笑いをしている

「それで、飛鳥

アンタが思ってる疑問何だけど、この間の光州作戦の影響と新任二名が怪我で任官が遅れてるからよ」

香月博士がそれだけ言つとA・01と香月博士が連れてきた女性の表情が一気に暗くなる

「すみません、余計なことでしたね

それで、そちらの女性はどなたですか？」

「気にしないでいいわよ飛鳥

まりも、アンタも早く挨拶しちやいなさい」

香月博士の空気を読まない発言に顔を引く付かせながら神宮寺軍曹が挨拶をしてくれる

「は、国連軍所属帝国軍白陵基地衛士訓練校教導官 神宮寺まりも軍曹であります」

「ああ、それで教官なんですね」

「そうそう、こいつら全員まりもの教え子なのよ
納得したなら飛鳥も早く自己紹介しなさい」

「そうでしたね

日本帝国征夷大將軍侍所第一小隊隊長 飛鳥冬樹特務少佐です

よろしく、まりもさん

それで、香月博士、なぜまりもさんが此処に？」

「ああ、まりもにもPT操縦の教導をしてもらおうと思ったからよ」

「ええッ!？」

ちよつとゆ、・副司令聞いていませんよそんな事

それに、PTとはいったい？」

「はいはい、シュミレーター室に着いたら教えてあげるから、さっ

さに行くわよ

アンタ達も自己紹介なんて終わってんでしょ
強化装備に着替えてさっさと来なさい」

それだけ言つと、踵を返して部屋から出ていこうとする
だが、扉の前に立ち、扉が開く直前に再び此方に振り返り、こう伝える

「いい忘れてたけど飛鳥について聞いていいことはPTの事だけよ
それ以外は全て”Need to Know”よ」

右手人差し指を唇につけて、そう伝えたと、今度こそ部屋を後にする

冬樹以外、全員が呆然となつて香月博士を見送っていた

「あー、大変ですね、まりもさんも」

「ご理解いただきありがとうございます、飛鳥少佐」

振り回されているまりもさんに同情しつつ、我を取り戻したA・O
1部隊とまりも、霞と共に部屋を後にした

余談だが、シュミレーター室に行く途中、まりもさんにも飛鳥か冬
樹で呼んでくれと言ったところで一悶着あったが、根負けしたまり
もさんに冬樹さんと呼ばれることとなった

三人称SIDE OUT

14 特務部隊A - 01 教導大作戦 前編（後書き）

うーん、ちょっとイマイチな出来で申し訳ないです

ちなみにA - 01メンバーの相原美沙は「君がいた季節」の登場キ
ャラの名前を使ったオリキャラです
それではまた次回をお楽しみに

14 特務部隊A - 01 教導大作戦 中編（前書き）

おまたせして申し訳ありませんでしたー！！ m（ー） m
リアルが忙しかったり、ネタが浮かばなかり、書き方を変更した
りしたら、投稿するのが遅くなっていました
こんなダメ作者ですが、これからも応援よろしくお願いします（非
望中傷は勘弁して下さい）

変更点の説明

- ・ ○○SIDE IN、○○SIDE OUT → ○○SIDE、S
IDE OUT に変更
- ・ 三人称SIDEを非表示に変更
- ・ セリフ毎の空白表示の仕方の変更

14 特務部隊A - 01 教導大作戦 中編

まりもSIDE

—— シュミレータールーム ——

冬樹さん、社と共に管制室に着くと、シュミレーターの準備をしているピアティフ中尉と私達の到着が遅いと言って機嫌を悪くした夕呼が仁王立ちで待ち構えていた

溜まっていた不満を私と冬樹さんを誂^{から}う事で発散すると、私にPT基礎概念とアルブレードMark?（和名・瞬刃）の資料を読めと渡してきた

「なっ！ なによこれ!？」

資料を読み進めていくうちに、私の表情は驚愕に染まり、思わず叫んでいた

今回の呼び出しも夕呼の我俣だろうと思い付いて来てみれば、いきなり斯衛の赤服を着た飛鳥冬樹特務少佐を紹介されるわ、A - 01と共に教導を受けるだの、PTと言う訳がわからない単語を口にするわ……夕呼に振り回されて内心、不満の溜息で一杯だったのだが、渡された資料の内容は夕呼の我俣なんてどうでも良いと思える位に衝撃的だったのだ

現行の戦術機とは違う概念の基、第三世代戦術機を遥かに上回る主機出力、光学兵器や電磁投射砲が標準装備の機体だなんて質の悪い

冗談、夢想の類としか思えなかったからだ

「ゆっ・・・副司令!!」

この資料に書かれているPT（機体）は本当に実在するんですか！
」

「なに失礼な事言ってんのよまりも

実際にこの基地に在るからアンタに教導つけろって言うてんでしょ
それにPTを開発したの、そこに居る飛鳥なのよ」

勢いよく冬樹さんの方に振り向き、私は事実かどうかを確認する

「本当なのですか冬樹少佐？」

「ええ、本当ですよ

それに香月博士の所には現在10機程譲渡してあります
それと”少佐”はいらないですよ、まりもさん」

微笑みながら答えてくれる冬樹さんにそう言われ、今度こそ本当な
のだと信じる事が出来たできた

「なによ、まりもは私が言うことが信じられなかったわけ」

「い、いえ副司令！

あまりに桁外れな事ばかりだったたので」

「ふん、まあいいわ

今からA-01がPTでヴォーグルデータに挑むから、それを見て
PTがどんな物が判断しなさい」

「ハッ！ 了解しました」

「はあく固つたいわねくまりも」

私が堅苦しいの嫌いなもの知ってるでしょ

私達だけの時はそんなことしなくていいわよ」

「ですが！・・・はあく、もう！！

わかったわよ夕呼！ これで良いでしょ！」

軍人としての態度を不満な顔で指摘し、態度を改させた夕呼は満足そうに頷く

そして今度はその顔をニヤニヤとしたものに変えて話し始める

こういう表情をした時の夕呼は私をからかう時のものだと言年親友をやっている私は直ぐ様気付き、顔を顰^{しか}めた

「それにしてもまりも」

「アンタ何時の間に飛鳥の事」冬樹さん」なんて呼ぶようになったのかしら」

それとも飛鳥のほうがりもに一目惚れ？

良かったじゃないまりも、良い嫁ぎ先が見つかった」

「なつ！！ なに言ってるのよ（んすか）夕呼（博士）！？ / /
／」

これだ。夕呼と親友になってから毎回毎回良いようにからかわれ続ける私っていったい・・・

それに冬樹さんも夕呼と知り合ったせいで私と一緒にからかわれてしまっている

ああ、余計に冬樹さんとは夕呼に振り回され続ける者どうし話が合う気がする

でも、なんで社は私を睨むように私を見るのかしら？
あんなふうに睨まれても可愛いだけなのに

「・・・・・・／／／」

まりもと冬樹が夕呼にからかわれている時に霞のうさ耳カチューシャが一瞬動き、一瞬頬を赤く染めていたが、それに気づくものはいなかった

「副司令

A-01、及びシュミレーターの準備が整いました」

「そう。それじゃまりもと飛鳥からかうのも此の位にしてさっさと始めましょう」

「くうくう！」

夕呼に文句の一つも言いたかったが、口では勝てない事と私情でシュミレーションの開始を遅らせる訳にもいかず、冬樹さんと二人で小さく批難めいた唸り声を上げていた

それでも此れから行われるシュミレーションでPTがどんな代物か確かめなければいけない

私は気持ちを切り替えてモニターに視線を移した

「それじゃーヴォーグルデータ難易度SS

戦域管制無し、地上陽動無し、通常武装、補給弾薬無しで開始しな

さい」

「ちょ！ ちょっと待ちなさい夕呼！！
いくら瞬刃が優れた機体だからといっても無茶苦茶よ！」

「まりも。黙って見ていなさい
無茶かどうかはこれから分かるわ」

夕呼の発言に私は思わず待ちなさいと叫んでいたが、聞き入れられなかった

いくらPT（瞬刃）が優れた機体性能と武器を所持しているといつても、一個小隊、しかも難易度SSのヴォーグルデータを挑むのは無謀と言っしかない

夕呼がいくら天才だといつても現場を知らなさ過ぎる
と、このシュミレーションの結果を見るまで私はそう思っていた

『——反応炉破壊完了、状況を終了します』

伊隅からの通信でシュミレーターが停止する
気がつけばA-01全員無事に反応炉に到達し、また、反応炉の破壊達成という全人類初の偉業を成し遂げていた

「どうだったかしらまりも？
これがA-01の——いいえ、PTの力よ」

「.....」

私は夕呼の問いに、直ぐ答えられなかった

余りにも衝撃的過ぎて、モニターを凝視したまま硬直していたからだ
それでも段々と体の硬直が解けてゆき、今度は小刻みに震えていた

——そう、歓喜と興奮で

「・・・す、ごい、凄いわ夕呼！！ 冬樹さん！！

PTは私達、いいえ、全人類の希望だわ！！」

夕呼と冬樹さんの方に振り向き、シュミレーションの感想を興奮しながら述べる

シュミレーションとはいえ、ハイヴ内でおこなわれた戦闘はまさしく
圧巻の一言に尽きた

圧倒的な攻撃・制圧能力、機動力はもちろんの事、まるで重力を無視した飛行機動技術、マニピュレーション戦術機特有の現象である、機動直後の硬直が存在せず、まるで人の動きでは無いのかと見間違えるような滑らかな動き

全てが今迄の、戦術機の常識を遥かに超えていた

そんなまりもの様な歴戦の戦士からの大絶賛と言っても過言ではない褒め言葉に夕呼と冬樹は予想道理の反応だと僅かに笑みを浮かべ頷いていたが、次の瞬間、二人の——いいや、管制室にいたまりも以外の全員の表情が変わる

「まりも・・・アンタ・・・」

「どうしたのよ夕呼？」

「アンタ・・・泣いてるわよ・・・」

夕呼が囁く様な声で、私が泣いている事を教えてくれた

「あ、れ、なんで・・・涙が・・・」

いつの間にか瞳から流れ出ていた涙を服の裾で拭っていくが、涙が止まることは無かった

其処か、自分が涙を流しているのだと気付いた時、私は何で泣いているのかと気付いてしまった

（そうか。私は悔しいんだ・・・）

P T（瞬刃）の性能は確かに希望を持たせてくれた。けれど同時に思ってしまった。何故もつと早くにP T（瞬刃）が開発されなかったと

あの時に此れがあれば仲間を部下を教え子達を失わずに済んだんじゃないかと・・・

この思いは只の八つ当たり。過去への贖罪と後悔

分かっている・・・分かっているのだけれど涙は・・・止まってはくれなかった

「——大丈夫だから」

「——え」

いつの間にか私の目の前に来ていた冬樹さんが言葉を紡ぐ

「俺は、まりもさんが今どんな思いなのか分からない
その思いを理解する事も出来るなんて言えない——」

「.....」

「——けど、今泣いているまりもさんに手を差し出してあげる事は出来る」

過去は無理でも現在きょうや未来あしたなら俺や仲間が支えてあげる事が出来る。
——だから、大丈夫ですよ」

そう言われた瞬間、私は冬樹さんの胸に飛び込み、声を殺して涙を流し続けた

冬樹さんは私をあやすように頭を撫で、社は心配そうに私のズボンの端を握り見つめ続けていた

夕呼やピアティフ中尉も何も言わず、ただ私が泣き止むのを黙って

待っていてくれた

” 大丈夫ですよ ”

たった其れだけの言葉なのに冬樹さんの言葉は私の心を救ってくれた。そう感じ取れた

「——ぐすつ、お、お見苦しい真似をして申し訳ありませんでした／＼／」

「いえいえ、俺としては役得でしたよまりもさん」

泣いていた時は凄く長い時間泣いていたと思ったが、実際は十分も経っていないかった

冬樹さんから離れ、涙を服の袖で急いで拭いて謝罪した

顔が羞恥で真っ赤に染まりながらも、冬樹さんの優しい慰めにさらに顔が赤くなっていくのが分かった

「はいはい、イチヤつくのはそこまでにしなさい
これから飛鳥に今の A - 01 の評価を付けて貰わないといけないんだから」

「くう／＼／／」

ニヤニヤしながら言ってくる夕呼に反論したかったが、ただでさえ私のせいで余計な時間を取らせてしまっているし、何よりこれ以上

夕呼に弱みを握らせたく無かった

「それで、飛鳥から見て私の部隊の評価はどれくらいかしら？」

今まで、私と夕呼の会話を困ったような笑顔で見ていた冬樹さんだったが、夕呼に部隊の評価を告げるように言われた瞬間、笑みが消え、淡々と評価を告げる

「そう、ですね・・・ハッキリ言えば評価する以前の問題ですね」

「——え」

その答えを聞いた瞬間、”何故”と言う疑問に頭の中が一瞬真っ白になり、呆けた声を上げることしか出来なかった

S I D E O U T

夕呼 S I D E

「どうだったかしらまりも？」

これが A - 0 1 の——いいえ、P T の力よ」

「.....」

シミュレーターの結果に声が出せないでいるまりもを見て、私は楽しんでいた

「・・・す、ごい、凄いわ夕呼！！ 冬樹さん！！」

P Tは私達、いいえ、全人類の希望だわ!!」

まりもがいきなり此方に振り返り子供のように喜んでいる
そんな姿を「まあ当然の反応よね」と思いつつ、次はどう弄^{いじ}ってあげようかと考えていた

けれど、その考えを実行することはなかった。・・・いいえ、出来なかった

「まりも・・・アンタ・・・」

「どうしたのよと呼？」

「アンタ・・・泣いてるわよ・・・」

まりもが唐突に涙を流し始めたからだ

嬉しくて泣いているのかとも思ったが、その考えをすぐに否定した
声は喜色に弾み、笑顔を振り撒いている筈なのに・・・涙に濡れた
瞬間、悲しみと憤りを必死に抑えてるような悲痛なものにしか見え
なくなっていたからだ

そんなまりもの姿に、顔には出していなかったと思うが、不覚にも
動揺してしまった

私はまりもになんて言ってあげれば良いのか判らなかった
親友の筈なのに、見てるだけしか出来なくなってしまった状況に、
私は内心で舌打ちしていた

けれど、そんな状況を破ったのは飛鳥だった

「——大丈夫だから」

そんな言葉から始まり、何時の間にかまりもの目の前まで近づいていた飛鳥は更にまりもに話し続ける

「俺は、まりもさんが今どんな思いなのか分からない
その思いを理解する事も出来るなんて言えない——」

「・・・・・・・・」

「——けど、今泣いているまりもさんに手を差し出してあげる事は出来る

過去きのうは無理でも現在きょうや未来あしたなら俺や仲間が支えてあげる事が出来る。
——だから、大丈夫ですよ」

飛鳥の話が終わった瞬間、まりもは飛鳥の胸に飛び込んで嗚咽を殺しながら子供の様にしがみ付いて泣いていた

私にはまりもがどんな思いで泣いていたのか、多分、理解する事は出来無いと確信めいていた

望むべき結果さえ得られれば、その過程に何があっても切り捨て、割り切る事が出来る私には

それが例え様もない後悔と懺悔の念であったとしても・・・

そして、まりもを慰めている飛鳥を見て、やはりという思いもあった
科学者として、能力者として、そして、一流の戦士である飛鳥なら、
私や社の心情を少なからず理解出来る飛鳥なら、まりもの心情も少
なからず理解出来るだろうと

まあ、その結果が今の状態なのだから、親友としては少し悔しくも
あるが、良かったと素直に思える

まりもが泣き続けて十分程たっただろうか
訓練の予定も有ることだし、そろそろまりもを止めようと思ってい
たら

「——ぐすつ、お、お見苦しい真似をして申し訳ありませんでし
た／＼／」

「いえいえ、俺としては役得でしたよまりもさん」

まりもが飛鳥から離れ、顔を赤く染めながら謝罪する姿をニヤニヤ
と見つめながら、今後の予定の為に動き始めた

「はいはい、イチヤつくのはそこまでにしなさい
これから飛鳥に今のA-01の評価を付けて貰わないといけな
いんだから」

「くう／＼／／」

まりもに誂い^{からか}の一言を入れつつも、今後の為に私の部隊の評価を飛鳥につけてもらわなければならない

まあ、まりもは後でたあ／＼ぷりと弄^{いじ}つてあげる事は決定けどね

「それで、飛鳥から見て私の部隊の評価はどれくらいかしら？」

飛鳥はそれまでの困ったような笑みを消し、淡々と評価を述べた

「そう、ですね・・・ハッキリ言えば評価する以前の問題ですね」

「——え」

飛鳥の評価にまりもは呆けた声を上げ、ピアティフの方も声には出していなかったが、顔は”何故”と驚いた顔をしている

けれど、私は飛鳥が下した評価に驚きはしない

飛鳥は甘い性格ではあるが、私と同じ現実主義者だ^{リアリスト}

飛鳥が評価以前の問題と言うのであれば納得出来る理由が既に有るのだろう

「ふん

で、説明はしてくれるんでしょ？」

「それはもちろん

でも、説明は伊隅さん達と一緒にしましょう

そのほうが効率的で都合が良いですしね」

「そう、それじゃあさっさと行きましょう
まりもも疑問に思うのならあっちに行ってから質問しなさい
そんな怖い顔していると飛鳥に貰って貰えなくなるわよ」

「なに言ってるのよ夕呼！！／／／」

「はいはい、さっさと伊隅達のところに行くわよ」

いつの間にか呆けた顔を軍人のソレにして飛鳥を見ていたまりもを
再び弄^{いじ}ってから管制室を後にする

さうで、どんな面白い話が聞けるのか楽しみだわ♪

S I D E O U T

冬樹 S I D E

管制室からシュミレーターが有る部屋に行くと、シュミレーターか
ら降りた伊澄さん達が整列して待っていた

「敬礼！」

「敬礼はいいつて何時もいつてるでしょ」

伊澄さんの掛け声で敬礼しようとした美沙さん、孝之、慎二の行動
を物凄く嫌そうな顔をして止めさせた

それを見ていたまりもさんは「軍規が・・・」と呟きながら溜息を履いている

「まずは良くやったと褒めておくわ

小隊全機無事にSS難度のヴォーグルデータデータ攻略なんて人類史上初の快挙を達成出来たわけだしね」

香月博士の労いの言葉にA-01全員が驚き、そして喜んでいた

「有難う御座います、副司令

ですが”我々の実力”と言うよりはPTの性能が凄過ぎると言った方が正しいかもしれません」

「そうね、確かに褒めの言葉は嬉しい限りなのですがPTの性能のお陰と言ったほうが正しい評価だと思いますわ」

「まあまあ、いいじゃないですか伊隅大尉も相原大尉も珍しく副司令が褒めてくれてるんですから」

「バカッ、孝之！

お前なんてこと言ってたんだよ！！」

あゝあ、孝之は馬鹿なこと言ってるよ

「ふゝん、鳴海はこの私が褒めてあげているのにそう言う事言うんだ」

ヘタレで涼宮と速瀬に二股かけてる鳴海が言うようになったじゃない

何時からそんな自信満々な態度が出来る様になったのかしらね」

「ふ、副司令、あの・・・」

「なぐに、ヘタレ二股超絶鈍感朴念仁の鳴海少尉」

「勘弁してもらえな」却下よ」・・・デスヨネ」

香月博士にあんな口をきけば徹底的に弄られ、苛められるのは目に見えて分かっていた筈なのに

他の皆も呆れた顔で孝之の事見てるよ

それにしても孝之は二股をかけていたのか・・・後で弄ってやろう

香月博士の孝之の弄りが終わり、漸く本題に入ることが出来る状態に戻った

散々香月博士に弄られ、苛められた孝之は意気消沈して慎二に慰めてもらっている

憐れ孝之、ナム」

「鳴海の大バカが私の褒め言葉を台無しにしたせいで話がズレたけどアンタたちA-01に飛鳥がつけた評価があるからさっさと聞いときなさい」

それだけ香月博士言つと全員が俺の方を向く

香月博士が場を温めてるから余計にやりにくい。絶対分かっててや

つてるから質が悪いんだよな」

それでも俺は意を決して評価を述べる

「じゃあ、俺からの評価なんだが・・・評価外。評価する以前の問題だ」

俺の述べた評価が意外、というよりも”何故”という困惑の表情をするA-01メンバー達と、俺が付けた評価を既に知っているまりもさんは、早く答えを知りたいという目で此方を見つめている

「どついう事だよ冬樹!!」

いくらなんでも評価外はねえだろ!!」

「止せ、鳴海少尉!・・・部下が失礼しました
ですが、私もその評価は納得出来るものではありません」

「私もです、冬樹さん
理由をお聞かせ願えますか」

「俺もだ!
いくらなんでも評価外は納得出来ない!」

俺に突っ掛つてきた孝之を伊隅さんが冷静な口調で諫めるが、不機嫌なのは目に見えて分かる。美沙さん、慎二も同様に理由が知りた
いと、俺に答えを求めてくる

「評価外にした理由なら今からキチンと説明する
それと誤解がないよう言っておきますが、A-01のPT操作技術
や組織連携の高さは認めています」

「なら!!」

「今からそれを説明すると言っている。黙って聞いている」

「ッ！ すまん」

落ち着いた孝之。それを冷徹な態度を持って切り捨て、話を続けていく

「俺がA - 01を評価外としたのは貴方達の技量云々という訳では無い
ヴォーグルデータ攻略に問題があったから評価外としたんだ」

評価外の原因を述べると、全員がまた”何故”という疑問の表情になる

「全員、何故って顔だね
では、まりもさん。これまでの戦術機によるヴォーグルデータ攻略はどういう戦略を取り、どうすれば作戦の成功と成りますか？」

困惑していた所に突然の質問をまりもさんに投げかける

「ハッ！ 地上砲撃の援護を行いつつ地表スタブ入り口からの侵入最低でも戦術機大隊規模によるBETA殲滅を行いながらの反応炉到達を目指し、S - 11による反応炉破壊が達成されれば作戦の成功と成っています」

また付け加えさせて頂くのでしたら、今回A - 01小隊が行ったヴォーグルデータ攻略も連隊規模が違っただけで作戦内容・行動は同一のものです」

さすがA - 01の教官を務めていたと言っべきか、突然の質問にも
淀みなく答えてくれた

「説明ありがとう、まりもさん

さて、今の説明を聞いて疑問に思うことはないかな？

伊隅さん、美沙さん、孝之、慎二

貴方達は今の説明で何か気付かなかったか？」

俺の問い掛けに4人は考え込んでいるが、答えは分からないようだ
まりもさん達も考えてはいるようだ、A - 01と同じく、答えに
は辿りつけていない

「飛鳥、焦らさなくていいからさつさと答えを言いなさい」

めんどくさくなった香月博士が答えを言えと急かしてくる

まあ、今の彼等には無理かもしれないな

「別に焦らしたくて言わなかったわけじゃあないですよ

答えは簡単。地上支援攻撃以外、ヴォーグルデータ、いやハイブ攻
略方法が全て間違っているってだけです」

「ハア！？」

香月博士と霞ちゃんは声にこそ出さなかったものの、全員が驚いて
いる

今まで訓練で行って来たヴォーグルデータの、ハイブの攻略が間違
っていると言われれば驚くと言う方が無理な話なのだろう

それに俺の言葉に驚いていた香月博士と霞ちゃん以外は、驚きが治まってくると逆に怒りや困惑といった感情が表れてきている

「飛鳥少佐！

あなたのお考えですと、我々は今まで間違った訓練をして無駄死を繰り返してきたと、そう仰っているように聞こえるのですが？」

態度こそ変えてはいないが、あきらかに怒気の籠った伊隅さんの問い。それを冷静に問い返す

「残念ながらそう言わざるをえない
それに貴方達は軍隊の基本を忘れてるんじゃないか？」

”軍隊の基本”、これはそんなに難しい事では無い

「軍隊の基本は分業制

大勢の敵と戦う為に一人一人が違う役割を持って戦うのが軍つて所だから、ハイヴに突入して反応炉を破壊する役目を追った部隊のする事は唯一つ

BETAを殲滅しながらハイヴに突入するのでは無く、極力戦闘は避け、速やかに反応炉まで到達し、破壊する事だ」

「・・・だから評価外とされたのですか？」

「伊隅さん。残念ながらもう一つある

実は反応炉を破壊してシュミレーションが終了したから評価外もし、目標が達成出来ず、全滅した場合だったら評価外には成らなかった」

「『『『『ええー！？』『』『』」

本日、もう何度目になるかも分からない叫び声が響く

み、耳が痛い。しかも隣に居たまりもさんも叫んでいるから余計に痛い

あ、霞ちゃんも余波を受けて石像みたいに固まっちゃてる

「あゝ！！ うつさいわね、アンタ達は！！

落ち着いて話も聞けないわけ！！

アンタ達のせいで耳が痛いじゃない！！」

「『『『『申しわけありませんでした！！』『』『』」

「うるさい！！」

あまりに五月蠅かった叫び声。その被害を受けた香月博士は額に青筋を立てて怒りを顕にした

取り敢えず全員で香月博士に機嫌を直してもらってから、話を再開した

「えゝと、反応炉を破壊したから評価外にしたって処まで話をしましたよね？」

つまりシュミレーションは反応炉の破壊で終了、此处が一番の問題点なんです」

一旦言葉を区切り、全員を見渡しながら再び口を開く

「本来なら反応炉の破壊後に脱出・帰還まで想定されたシュミレー

シヨンでなければ成らないのに、それがまるで無視され、考えられていない。生き残る為の訓練が、実際には神風特攻じみたものでしか無いなら、評価を付ける付けられないの段階ですら無い

——それと、反応炉に到達できず、全滅した場合は評価が付けられるって言ったのは、その事から洗い出せるPT操作技術、部隊連携の問題点、状況判断etc・・・と、悪い意味で評価が付けれたんだ」

まあ脱出・帰還云々の話も悪い評価だったらこんな反感も買うこと無く説明できたんだけどねっと、言外に貴方達は優秀だという意味を込めて、少し肩をすくめて最後に言っておいた

けれど、俺が評価外と言ったのはこういう理由があったからだ

今までの説明が終わり、全員がポツポツと口を開いていく

「なるほどね」

確かに今の人類はBETA「殲滅」て意識が強すぎて、ハイヴ攻略でも殲滅戦が基本になってるわね」

「そうね。BETAの驚異に注目しすぎて今までの考え方が如何に凝り固まっていたか良く分かったわ

・・・まったく、自分の不甲斐なさに情けなくなるわ」

「神宮寺教官、あまりご自身を卑下しないでください
私自身も今の飛鳥少佐のお話を聞かなければ気付きさえしませんでした

情けないのは我々も同じです」

「そうですよ、神宮寺教官

私達は冬樹さんのお陰で気づくことができたんですから
これから変わっていけば良いだけなんですから」

「それに教官がしおらしくするなんて似合いませんって」

「孝之・・・お前はなんでそう余計なことを・・・」

「——まったく、私はもうあなた方の教官では無いと言っている
のに」

・・・それと、鳴海少尉は後でお話がありますので」

「げえ！ きよ、教官それは・・・」

「なんででしょうか？（ニツコリ）」

「イエ、ナンデモアリマセン」

あいかわらずの孝之は放つといて、取り敢えず、全員の理解は得られた

「ま、この話は此れ位にして

今度は俺が正しいハイヴ攻略のやり方を見せましょう

序に教導官である俺の実力も知っておきたいでしょう？」

「ハッ！」「ハッ！」

ニヤリと笑いながらそう言つと、それに答えるようにA・01とまりもさんは敬礼で返答してきた

俺は横に居た霞ちゃんの目線まで腰を落とし頭を撫でながら、ある

事を頼んだ

「・・・・・・・・わかりました／＼／」

頭を撫でていた手を離すと、今まで猫のように細めていた目を開き、物凄く残念そうな顔になる

それでも俺が頼んだ事をする為に、ピアティフさんを引き連れ、管制室の方に歩いて行った

俺が罪悪感をヒシヒシと感じながら霞ちゃんを見送っていると、香月博士は相変わらずイイおもちゃが手に入ってたって感じでニヤニヤしながら此方を見ている

まりもさんも何故か羨ましそうに此方を見つめているし、A・O1の連中にいたってはコソコソと何か黒いものを感じさせるように喋っている

香月博士達が俺の方をニヤニヤと見ているのには気付いていたが、無視することにした

特に香月博士、特に香月博士に何か言おうものなら確実に不幸になる（重要な事などで2度言いました）

後の訓練でA・O1の連中には地獄の特訓（憂さ晴らし）をしてあげようと心に決めて、俺はシュミレーターに向かった

「ピアティフさん

此方はいつでも始めて貰って構わない」

シュミレーターの座席に座り、準備が出来ている事を知らせる

『——此方も準備が整いました

しかし飛鳥少佐、本当に強化装備も着ずに、こんな設定のヴォーグ
ルデータシュミレートを実行しても宜しいのですか？」

「ああ、かまわないよ
状況を開始してくれ」

俺の身体の事を心配してくれているのだろうが、問題は無い

P Tの耐G能力の高さもあるが、強化装備はあくまで戦術機の為の
装備

P Tのコックピットで強化装備を着用しても耐Gスーツくらいの役
割しかないのだ

それに今回は、あくまで手本を見せる事が目的であり、全力を出す
訳でもキツイGが掛かるような動作技術を行使する訳でもない

『——・・・了解しました。状況を開始します』

管制室からの通信が切れ、景色が切り替わる

全天候モニターに映しだされたスタブ入り口と、侵入を阻止する為
の大量のBETAの群れ

しかもシュミレーション開始早々に光線級まで出現しており、コッ
クピットの中では既にレーザー照射の危険を知らせる警報が鳴り響
いていた

「さあて、行きますか！」

アラート
警報なんて気にもせず、推進器を一気に噴かせ、飛行によるスタブ突入を開始した

SIDE OUT

「「「「「なっ！？」」「」「」」」」」

冬樹がヴォーグルデータを開始した早々に叫び声が反響する_{こだま}

シュミレーション開始早々、光線級に狙われるなど、今までまりもやA-01のメンバー達が訓練してきた中でそういう状況になった事など一度もなかったからだ

また、冬樹が最初に起こした行動も彼女達を驚かせた要因の一つである

冬樹はBETAの上を”飛行して”スタヴ突入を開始したからだ

彼女達の誰もが思っただろう”冬樹はレーザーに撃ち落される”と

そして、光線級からレーザーが照射された瞬間、またもあり得ない事が起こる

「「「「「なっ！？」」「」「」」」」」

冬樹の操る瞬刃が光線級のレーザーを避け、反撃まで繰り出したのだ

冬樹が瞬刃で行った操作は、レーザーが照射される瞬間、機体を急降下させてレーザーを避けると同時に遠距離射撃武装であるブーステッド・ライフルを光線級が群れている場所に打ち込み、余波も利用して最小限の攻撃で光線級を殲滅したのだ

其れだけの動きを一瞬で、尚且つ、ハイヴ突入を止めずに行なっている

シュミレーション開始頭初から光線級に狙われるという異常事態を難なく躲し、スタブ入り口からの突入は成功する

だが、異常事態はまだ続いていた

ハイヴ内で光線級が姿を現し、レーザー照射を繰り出してきたのだ
普通ならあり得ないが、冬樹は異常とは思っていなかった。否、予定道理だと思っていた

それは、冬樹がシュミレーターに乗る前に霞に頼んでいた事だからだ
冬樹が霞に頼んだことは四つ

一つ、シュミレーションが開始したら直ぐに光線級を出現させる
二つ、ハイヴ低深度までは、光線級を出現させ続ける
三つ、反応炉破壊後もBETAは攻撃を続ける
四つ、シュミレーションは反応炉を破壊し、地上の元の地点ポイントに戻るまで終了しない

と、これだけの事を頼んでいたのだ

故に冬樹が焦る事などない

光線級のレーザー照射を躲し、必要最小限の攻撃で突入経路を確保していく

そして、シュミレーションを見ていた彼女達は、もう絶句する事しか出来なくなっていた

あまりにも異常事態が起こり過ぎて、もう声を発する事さえ出来なくなっていた

14 特務部隊A - 01 教導大作戦 中編（後書き）

後編も何とか早く上げたいと思います。これから応援よろしくお願ひします

また、過去作品に付きまして、今回の後編を書き上げたら、新章と同時に再編集します

12 新部隊結成 前編で日本に既に佐渡島ハイヴがあると書いてしまっていました

佐渡島ハイヴ↓重慶ハイヴに変更しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4099s/>

オルタの世界にやってきた

2011年10月3日13時57分発行